

正五位下行相模守平朝臣時頼敬書

(右の)伏願。三品親王征夷大將軍。干戈偃息。海晏河清。五穀豐登。萬民康樂。法輪常轉。佛日增輝。

建長五年癸巳十一月五日

住持傳法宋沙門道隆謹立

夫當山は 後深帥院御宇建長元年の創建にして開山は宋國大覺禪師諱は道隆又蘭溪と號す本願は北條相模守平時頼也佛殿の莊嚴微妙にして天井の畫は狩野元信彫物は左甚五郎が作といふ殿内の傍には陣鐘陣太鼓あり寺僧云これは頼朝卿富士の牧狩の時用ひ給ふ具也とぞ金龍水は西の門前にあり鎌倉五水の其一箇也勝上巖は方丈の北なる高き山をいふこゝに蘭溪の坐禪窟ありむかし禪師此窟中に靜坐し給ふ所に一邇上人來りて和歌を詠給ふ

一邇上人
なごりはれまふしてたにしかなほめた
いれふりじてはいかゝあるへき
禪師返し
踊りはれ庭に穂ひろふ小雀は
驚のすみかをかゝしるへき
大覺禪師

最明寺舊跡

山之内にあり福源山禪興寺といふ關東禪院十刹の其一也本願は平時頼にしてむかしは七堂伽藍也今廢寺となる

明月院

最明寺の東にあり開山は大覺禪師の法孫密室守嚴和尚本願は上杉安房寺憲方也

六國見

明月院の十景の其一也此寺の上方をいふ安房。上總。下總。武藏。相模。伊豆の六國見ゆる

『瓶井』明月院のうしろ口にあり十井の其一とつ也

淨智寺

明月院の向ひにあり鎌倉五山の第四也開山は宋佛源禪師本願は平時時也

『甘露井』淨智寺開山塔の後にあり又門外左の路傍に

ある清水をいふ十井の其一つ也

瑞鹿山圓覺禪寺

山之内にあり鎌倉五山の第二な

『寶冠釋迦佛』佛殿に安す臘士梵天帝釋共に卿殿が作

大光明寶殿

佛殿の額

『選佛場』佛殿の西にあり『方丈』佛殿の東北にあり聖

觀音を安す此尊像初は明鏡堂に安す廢してこゝにうつす

『辨天窟』佛殿の西北に

あり傍に天滿神を祀る

圓覺興聖禪寺

山門の額
花園帝宸筆

瑞鹿山

總門の額後光嚴帝宸筆『白鷺池』總門の左右にあり開山來朝の時八幡宮白鷺と化して導をなし此池に止り給ふ

『開山塔』方丈の西北四町許にあり萬年山と額を打正續院といふ平の貞時の建立也軒に常照の額あり開山

佛光禪師の像あり肩と膝に鳩と龍とを置也禪師の錄

は元享釋書に見ゆ『宿龍池』開山塔の後にあり開山來朝の時龍現して船中を護り來て此池に棲也

『坐禪窟』開山塔の上方にあり開山禪師坐禪し給ふ窟

なり『鹿殿』方丈の後山にあり當山建立の時鹿出て奇

瑞ありしゆゑ山號とす『妙光池』方丈の北にあり『虎

頭岩』妙光池の北にあり

『洪鐘』佛殿の南の上方にあり高さ八尺土人訛て龍

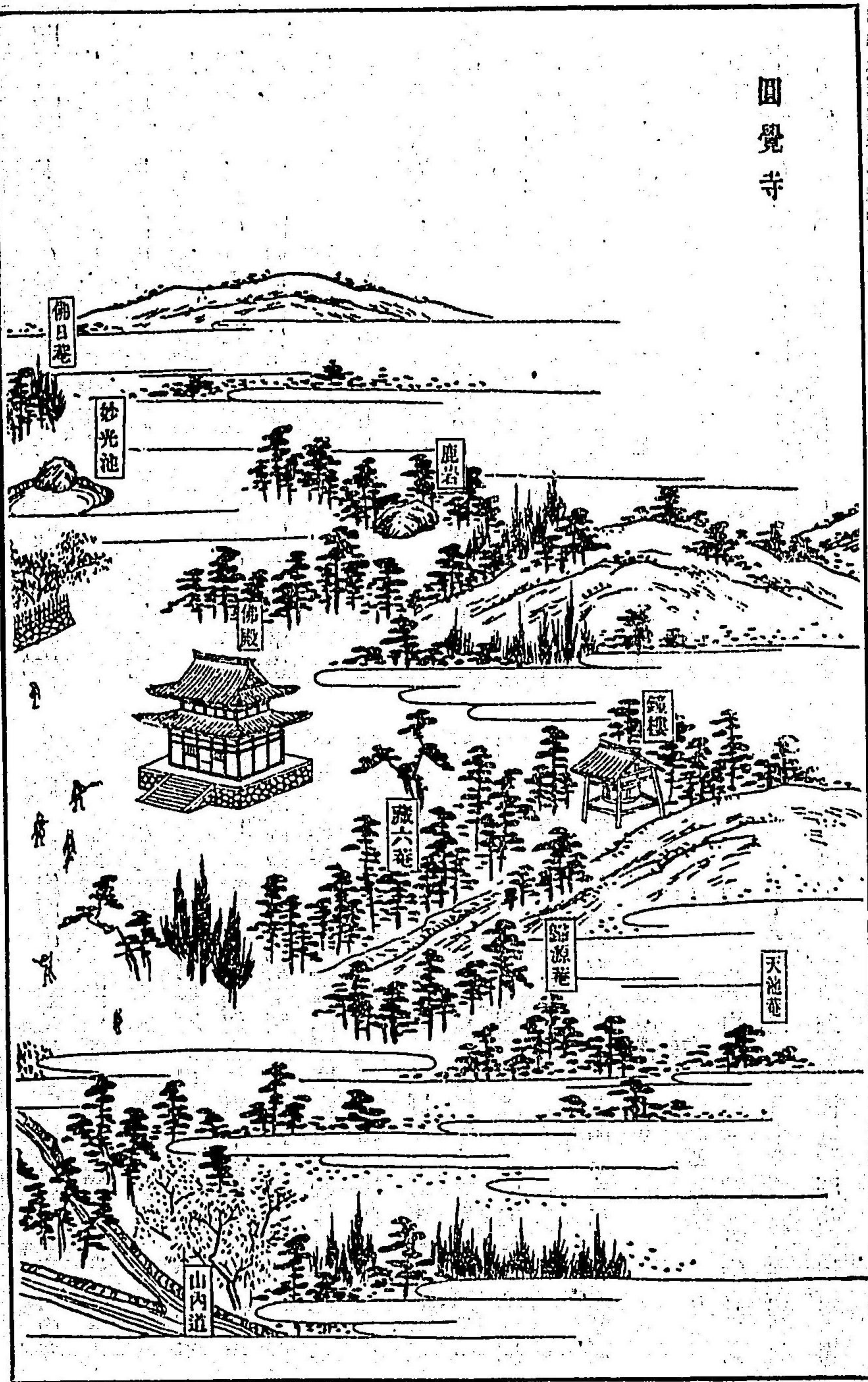
宮より上るといふ種々の奇瑞あり

鐘銘曰

相模州瑞鹿山圓覺興聖禪寺鐘銘

鶴岡之北富士之東有大圓覺爲釋氏宮恢廓賢聖躡象龍籠天地素籥

圓覺寺



全功銘金去鑄銀頭銅成大法器啓
迪昏蒙長鯨吼月幽谷傳空法王號令
神天景從祐民贊國植德旌忠停酸息
苦超越焚籠高輝佛日普扇皇風浩々
湯々聲震寰中風調雨順國泰民安皇
帝萬歲重臣千秋

正安三年辛丑七月初八日

大檀那從四位上行相摸守平朝臣貞時勸縁同
成二大器 當寺住持傳法末沙門子墨謹銘

『什寶佛牙舍利』當山什寶の第一とす開山塔正續院に
藏む長さ一寸二分傳云將軍實朝公浮圖を信じて金銀
貨財を多く宋國へ贈り佛舍利を乞ふ宋人其厚信を感
賞してこれを渡す舍利記一卷あり鎌倉志に見えたり
其外靈寶數品あり

抑當山は 後宇多帝御宇弘安五年臘月八日北條相模
守平時宗の創建にして開山は宋國の人佛光禪師諱は
祖元字は子元弘安二年に來朝す傳は元亨釋書に載た
り寺産は鎌倉風百四十貫也むかしは大夏にして伽藍

玲瓏子院數々あり山頭の雲霧寂寥として香火の烟麴
々たり殊勝の禪壘にして京師天龍。相國の二寺鎌倉
建長。圓覺の兩刹共に轉住の號今に於て絶す杜甫が
文公の廟に謁し禪龕只晏如たりと書たりしは此あた
りの事なるべし

東慶寺 松岡と號す圓覺寺の南也禪宗比丘尼住職す

開基は北條時宗の室秋田城介の女にして潮音院覺山
志道尼と號す第廿世の住職は豊臣秀頼公の息女にて
天秀泰和尚といふ元和元年薙染ある時に八歳正保二
年二月七日入寂し給ふ佛殿の後に石塔婆あり當寺の
領百二十貫文

長壽寺 龜谷にあり寶龜山と號す關東諸山の第一也

源基氏父魯氏公の追福の爲に建立す開山は古先和尚
『本尊釋尊』佛殿に安す又魯氏公の像ありむかしは伽
藍巍々たり廢して後客殿に安すこれを獅王殿といふ

常樂寺 粟船郷にあり初は天台宗蘭溪入院後禪院と

なる本尊彌陀三尊北條泰時の草創也
木曾塚 常樂寺の上方にあり傳云義仲の嫡子清水冠

者義高鎌倉にありて頼朝の婿となりしが父義仲粟津
原にて亡び給ふ後密に遁れ出らる武州入間川にて追
手堀藤内に討れ實檢の後こゝに葬る

『鐵井』雪の下西南の路傍にあり鎌倉十井の其一つ也
むかし鐵の觀音の御頸を此井より掘出す故に名とす
此御頸は側の小堂にあり

松源寺地藏尊 鐵井の西にあり頼朝卿豆州配流の
時開運を祈り給ふ其後豆州日金山よりこゝに移す故
に日金山の地藏といふ

窟不動尊 松源寺の西にあり此不動尊石像は弘法大
師の作といふ

壽福寺 扇が谷にあり鎌倉五山の第三也開山は千光
國師茶西也原此地は源頼義。義家東國征伐の時こゝ
に居し給ふ古跡也
『本尊釋迦』唐の陳和卿が作にして籠に編て張たる
物也世に籠釋迦といふ

實朝塔 壽福寺の傍にあり窟中方一丈許にして牡丹
唐草の彩繪多く中にあり中央に石塔婆を安す千光國

師は實朝の歸依僧なれば追福の爲こゝに營給ひしと
見えたり

東光山英勝寺 扇谷にあり此地は原太田道灌舊跡

也太田氏英勝院禪尼念佛道場を營む其後水戸中納言
頼房卿御息女薙染ありて再興し住職し給ふ此邊の大
廈にして諸堂の壯嚴玲瓏たり寺寶種々あり畧之

『本尊阿彌陀佛』運慶の作佛殿に安す左右は善導法然
の像あり額は寶珠殿と書して良想法親王の筆也
『山門額』英勝寺と書す 後水尾帝の宸翰也裏書云寬
永二十一年甲申十一月日臨寫之云々

『總門額』東光山と書す裏書云寬永二十年四月十一日
無障金剛二品親王良恕書之云々

相陽鎌倉英勝寺鐘銘
扇谷靈區英勝精廬巧鑄法器新脫轡
摸華樓直架蒲牢高呼聲來耳往外圓
中虛漁嵐成曉湘烟向哺遍滿忍界透
徹迷慮梵唄無倦德音不孤令聞千歲

日居月諸。寛永廿年五月吉日

『石盤』方丈の前にあり澤庵宗彭銘を作る其文如左

星拱北兮水朝東。前風動兮物相從。後山靜兮人上裏。一根清兮諸根融。

以漱石兮足潔躬。

一陰生兮暗蒼穹。梅雨連兮客維篷。江雲迷兮暮擁網。掛其象兮在午宮。

石爲陽兮水湛中。

惟時秋兮山染楓。二陽沈兮一陰汎。上貯水兮奪化工。金風拂兮雲盡空。

寒月涵兮影如弓。

庶不孤兮物盡蒙。一得五兮其數充。此源深兮此流豐。水洊至兮繞峒峒。

朔方化兮于茲隆。

阿佛尼塔 英勝寺境地北の方にあり此尼公は遺跡の争論にて爲相卿と共に鎌倉へ下り訴訟の事に暫くここに棲し也墓は京師大通寺にあり

源氏山 英勝寺の西の山をいふ八幡太郎義家東夷征

伐の時こゝに旗を立給ふ今に旗竿の跡あり

『泉井』泉谷にあり鎌倉十井の其一つなり

網引地藏 淨光明寺の山中にあり昔由比濱より漁夫の網にかゝりて上り給ふとなん此寺は平の長時の建立にて宗旨八宗兼學也

矢拾地藏 淨光明寺の境内慈恩院にあり傳云源直義の守本尊にて軍戦の時僧と現し矢を多く拾ひ給ふと

藤原爲相塔 網引地藏の後山にあり土人忍性上人の塔といふは訛也文字は分明ならず

『扇井』扇谷にあり十井の其一つ也此邊を大友第といふ

海藏寺 同所にあり本尊を啼藥師といふ此山中にて毎夜兒の泣聲あり其地を掘れば藥師の頭を掘出す開

山は源翁和尚大覺禪師の法嗣也

『底脱井』海藏寺門前にあり傳云むかし上杉家の尼參禪して此水を汲時投機す和歌あり

殿の女かいたく桶の底わけて 水たまられば月もやとらす

兵衛景清が女也龜谷の長に預りし也とぞ

尊氏第跡 人丸姫家の南の圃をいふ尊氏第は鎌倉に三所あり

典禪寺 壽福寺の南にあり開山は奥州松島雲居禪師本願は朝倉筑後守が長子甚十郎也父追善の爲に建立す

『裁許橋』佐介谷より流出る川に渡せる橋也頼朝卿在世の時此邊に政所あつて裁許し給ふゆゑ名によぶ十橋の其一つ也

佐介稻荷祠 佐介谷にあり毎年二月初午日鎌倉中群參す靈驗ありとて常にも詣人多し佐介谷は口の方

東南へ向ふて境地廣し其の中に谷々多し佐介遠江寺住居せしより此名あり一説には上總介。千葉介。三浦介の三介此の地に住せしより三介谷とも云ならはせり

隱里 佐介谷にあり大巖窟也

錢洗水 隱里の窟中にあり福神こゝに来て錢を洗ふ音すると也鎌倉五水の其一つ也

十六井 海藏寺の山中窟の内にあり土人云弘法の加持水也とぞ

景清窄窟 化粧坂にあり傳云悪七兵衛景清を捕へてこゝに籠置しとぞ今見るに窟中淺くして窄とすべき

物にあらず古ありしは頽廢して後世准へ作るもの歟傍に向陽庵といふありこゝは景清が女の開基にして景清が守本尊十一面觀音を安す

假粧坂 扇谷より西へ行坂路也いにしへ鎌倉の傾城町也會我五郎が馴染し少將梶原源太が歌を詠て送りし遊女もこゝ也大磯の東の化粧坂は謬なり

鍛冶正宗宅 今小路勝橋の南町也正宗が父行光貞應の頃鎌倉に來り住すこゝに及稻荷といふあり正宗が祭る所也

佛師蓮慶宅 正宗第の西也蓮慶は京師東寺の佛師也

巽荒神 今小路の南にあり今は淨光明寺の玉泉院の持也

人丸姫塚 巽荒神の東島の中にあり人丸姫は悪七

持也

持也

持也

持也

持也

持也

持也

天狗堂 佐介谷にあり昔愛宕祠ありし也太平記に天狗堂と扇谷とに軍ありと書しはこゝ也

千葉常胤宅 天狗堂の東の方にあり今田圃となる
佐々目谷 裁許橋の西南也むかし此谷に法然上人の弟子隆観房住しと也

塔辻 七重石塔婆佐々目谷東南の道傍に二所あり甚古代の跡なり此塔鎌倉中に所々建り建長寺前圓覺寺前雪の下鐵觀音前小町口等にもあり土人諺云むかし由井長者染屋太郎時忠の子を桑畑にて鷲に抓れ行衛しれず其頭骸骨切れて所々に落散りし所ありこれぞ我子の骸ならんと菩提の爲に落散りし所々に塔を建しと云傳へり此山縁前卷大山寺の下にくはしく辨せり予此塔を按ずるに正慶建武の頃北條高時亡びし時多くの戦死の者を葬りて北條家建立の寺僧など其所々に建しと見えたり

盛久頸座 塔の辻の南をいふ長門本平家物語に清水觀音の靈驗によつて太刀断々に折て頼朝卿より斬罪免除の事を書り又謠曲にもあり

甘繩祠 佐々月ヶ谷の西にあり天照太神を祭る又八幡太郎義家の像あり奉幣の事東鑑に見えたり

藤九郎盛長家 甘繩祠の東をいふ(東鑑)に治承四年十二月武衛頼朝初て藤九郎盛長の家に入らせ給ふとあり

水無能瀬川 御輿嶽より長谷の前を流れて海に入土人稻瀬川といふ

萬葉 眞かなしみされにわはゆくかまくらの

みなせ川に潮みつなんか

夫木 東路やみなせ川にみつしほの 野宮左大臣

ひるまもみへの五月雨のころ

家集 湖よりも霞やさきにみちらぬらん 藤原爲相

水無能勢川のあくる淡は

同 さしのほるみなせ川の夕しほに 同

淡の月のかけそちかつく

夫木 立まかふ波のしほ路しへたりの 從三位爲實

水無能勢川の秋の夕暮

紀行 水浅き濱のまさこを越波し 法印 幾 基

みなせ川に春雨そふる

光則寺 大佛へ行道の左にあり北條時頼の臣宿屋左衛門光則入道が居宅の古跡也故に地名を宿屋町といふ日蓮上人龍口の難に遇て土の籠に入給ふ時弟子日

四上人は 鎌倉の將軍 家に於て三 日三夜軍法 を説いたる 其思訓に銀 の猪の香爐 を賜ふこれ を携出られ 無心境界に 登なして門前の草に とらせてかへられけり 阿房の賦に 別は鏡の如く 珠は石の如く金は塊 のごとく銀 は塊の如しと書れしも 同日の論な らめと其頃 より入みな 西上人の徳 を食むとぞ 叫まし



朗日心檀那四條金吾父子四人光則に預けられ土籠に入らる日蓮上人不思議の奇瑞有て害を免れ給ふ光則もこれより信を起し宅地を日朗に寄附し開山とす故に父の名を山號行時山とし我名を寺號とす堂内に日蓮上人。日朗。光則。四條金吾等の像を安す『日朗上人土牢』當山北の方にあり

大佛 初瀬村深澤にあり大威山清淨泉寺といふ淨土宗光明寺の末派也いにしへは建長寺の持也寺内に金洞盧遮那佛座像を安す堂宇なし又雨露覆もなし長三丈五尺際廻り横五間半腹内に六觀音阿彌陀三尊佛を安す參詣人腹内に入窟の如し寺僧云初は 聖武帝の

建立にして當國にて國分寺の舊跡なり大佛殿の古礎都て六十餘石あり何れも亘一間許(東鑑)に深澤の大佛建立の事あり其時は長八丈の阿彌陀の像を安す舊記に云應安二年九月三日大風鎌倉大佛殿顛倒す又明曆四年八月十五日洪水由比濱激揚し大佛堂破ると云云阿彌陀佛は何れの代に亡びけん建長寺の記に大佛堂の開山大素和尚とありこれも中興ならん歟詳なら

御輿嶽

大佛の東の山をいふ

萬葉 かまくらのみこしか崎の岩くえの

君かくゆべき心ほもたじ

名寄 鎌倉やみこしかたけに雪さえて

左京大夫 願仲

草紙 都にははや吹ぬらん鎌倉や

みこしか崎の秋の初風

宗 尊 親 王

常盤里

大佛の切通しを越れば常盤といふ〔東鑑〕に

建長八年八月廿三日將軍家新奥州政村が常盤第へ入

らせ給ふとあり

平時範が常盤山莊にて奇花祝さいふ事を讀る

新後 うつろはてよるつ代にはへ山櫻

藤 原 景 綱

花もときばの宿のしるしに

此歌を昌琢が類字名所には山城の常盤に入たり契沖
が吐懷編にもこれを考へ残し侍る

長谷寺

長谷村にあり海光山と號す淨土宗光明寺の

末派坂東巡禮所第四番

『本尊十一面觀音』長 丈六尺二步春日佛師の作和州

長谷の觀音と同木にて和州は木の本此像は木末とい

ふ又堂内に如意輪像勢至像。聖德太子像。和州長谷開

山徳道上人像等を安す毎年六月十七日當寺の法會に

て遠近こゝに群參す寺領二貫文

御靈社

長谷村西南にあり祭る所鎌倉權五郎平の景

政の靈といふ〔保元物語〕後三年の合戦に鳥海城を
落されし時生年十六歳にて左の眼を射られ其矢を抜

ずして答の矢を射て敵を殺し名を後代に輝し神と祝

れ侍り〔東鑑〕に建久五年正月御靈社へ奉幣八田知家

御使あり其外往々に見えたり攝州大坂に御靈社あり

これも此景政の靈を祭る也とぞ

星月夜井

極樂寺切通へ上る坂の右下の方にあり里

諺云むかしは此井中に晝も星の影見ゆるゆゑ名とす

一年此邊の土民此井水を汲に來り過て菜刀を井中へ

落すそれより星の影あらはれずとなん此井の西に星

月山星井寺とて本尊は虚空藏菩薩を安す傳云 聖武

帝の御宇天平年中に此井中に虚空藏の影見ゆるよし

を奏達しければ行基に勅ありてこゝに來り此影を見

て本尊を作り給ふとなん按ずるに鎌倉山の星月夜と

は頼朝卿初て征夷將軍に任じ四方の諸侯參勤し綺羅

土佐房第趾

寶戒寺の南の圃をいふ即此寺の境内

なり

葛西谷

寶戒寺東南の谷也此地にむかし東勝寺とい

ふ禪刹あり北條家代々の墳墓を築く高時其外一門こ

ゝにて亡し所也今も骸骨を掘出す事あり

〔太平記〕相模入道も東勝寺に於て腹切給へば城入道

つゝいて腹をぞ切たりけるこれを見て堂上に座を列

たる一門他家の人々雪の如くなる膚を推肌脱々て腹

を切もあり自頸を搔落すも多し思ひくの最期の體

特に由々敷ぞ見へたりし〔中略〕總て其門葉たる人貳

百八十三人我先にと腹切て屋形に火を懸たれば猛火

熾んに燃上り黒煙天を掠たり庭上門前に並居たりけ

る兵共是を見て或は自腹搔切て炎の中へ飛入るもあ

り或は父子兄弟差違て重り臥もあり血は流て大地に

溢れ漫々として洪河の如くなれば屍は行路に横て累

々たる郊原の如し死骸は焼て見へねども後に名を尋

ぬれば此一所にて死する者總て八百七十餘人也此外

門葉恩顧の者僧俗男女を云す聞傳て泉下に恩を報す

星の如く威を輝しけるをいふなるべし

後堀川 我ひこり鎌倉山をこへ行は

〔紀行〕極樂寺へ至るほどにいとくらき山間に星月夜

といふ所ありむかし此道に星の御堂とて侍りきなど

古き僧の申侍りしかば

今もなを星月夜このころらめ

寺なき谷の闇の灯

△是より已下鶴岡若宮小路より東南の名所に至り末は朝比奈切通よ

り六浦金澤に至る

寶戒寺

鶴岡若宮小路の東にあり金龍山と號す開山

五代國師

『本尊地藏尊』座像長三尺五寸左右梵天帝釋又尊氏の

持尊地藏を安す行基の作也又不動尊を安す大山寺と

同作也

『徳宗權現』寺内にあり北條高時の靈を祭る

北條屋敷

寶戒寺の北をいふ將軍頼經已後代々將軍

家も執權北條時政より高時まで同館と見えたり故に

北條第と呼ぶ

る人世上に悲を促す者遠國の事はいざしらす鎌倉中を考ふるに都て六千餘人も嗚呼此日何なる日ぞや元弘三年五月廿二日と申に平家九代の繁昌一時に滅亡して源氏多年の蟄懐一朝に開くる事を得たり

屏風山 寶戒寺の東にあり屏風を立たる如くゆる名

小富士 屏風山の傍の峰をいふこゝに社ありて神跡に富士形の石を居淺間大菩薩と鑄す毎年六月朔日群

塔辻 寶戒寺の南をいふこゝにも石塔あり土人訛て北條館の下馬の標といふこれらも戦死の者を葬りたるしるしなるべし

行池 小町の西側妙隆寺にあり寺説云日親上人此池にて十指の爪を放し血を洗ひ曼陀羅を書しより行の池といふ

産女塔 同所大巧寺にあり日棟上人ある夜産女の幽霊に遇ふ即法華の題目を授て回向を修す産女贖金を恩謝に捧れば其爲に塔を立るなり

なし土人云近年天明三年八月龍出て寺を破る故に龍卷寺といふ

天照山光明寺 鎌倉巽の方亂橋村にあり淨土宗鎮西六派の内白旗流義なり

『本堂記主禪師』自作の木像を安す此禪師は法然上人の孫弟聖光上人の弟子也初めは良忠然阿上人と號す石州の人也弘安十年七月六日寂す年八十九記主禪師と諡す勅額今什寶として寶庫に藏む

『阿彌陀堂』本堂の左にあり本尊阿彌陀佛は運慶の作也脇士觀音勢至を安す

『祈禱堂』阿彌陀堂の側鳥居の内にあり恵心の作の阿彌陀左の方に辨財天右の方に善導大師を安す祈禱の勅額今寶庫にあり

『方丈』本堂の北にあり蓮華院と號す運慶の作の阿彌陀を安す

『開山塔』本堂の後山にあり記主禪師の石塔婆を建る

『天照山』當寺の後山をいふ

『記主水』後山の麓にあり開山の開發し給ふ清水也

妙本寺 比企谷にあり日蓮宗池上本門寺の兼帶所也

開基日朗上人初め日蓮上人說法の寺也 『本尊釋迦佛』日蓮上人豆州左遷の時立像の釋迦を隨身す後に日朗に附屬して今は京師本國寺にあり此本尊は其模形也

比企判官古趾 比企谷にあり比企判官能員能員の女の若狭局を將軍頼家の妾に上て一幡君を産り故に能員龍恩を蒙りて威勢熾ん也因是北條を滅さんと謀る遂に露顯して北條時政の爲に誅せられ一族永く亡びたり

田代觀音 妙本寺の東南にあり此地田代冠者信綱が舊跡也本尊千手觀音坂東巡禮所第三番

裸地藏 米町の西にあり延命寺といふ本尊地藏は裸形にて女根あり雙六盤上に安す

補陀洛寺 材木座の東にあり眞言宗南向山といふ開山は文覺上人又頼朝の係有頼朝卿日頃文覺の恩を謝せんが爲に此寺を建られしなり

『本尊藥師佛』文覺の勸進帳の切あり首尾破れて年號

『藏王窟』記主水の上にあり鎌倉の海眼下に遮りて風景の地也

『山門』額は天照山 後花園帝の宸筆也裏書に永享八年丙辰十二月十五日

『善導塚』總門の外にあり

『北條家墓』寺内山腹にあり本願北條經時一門の墳なり

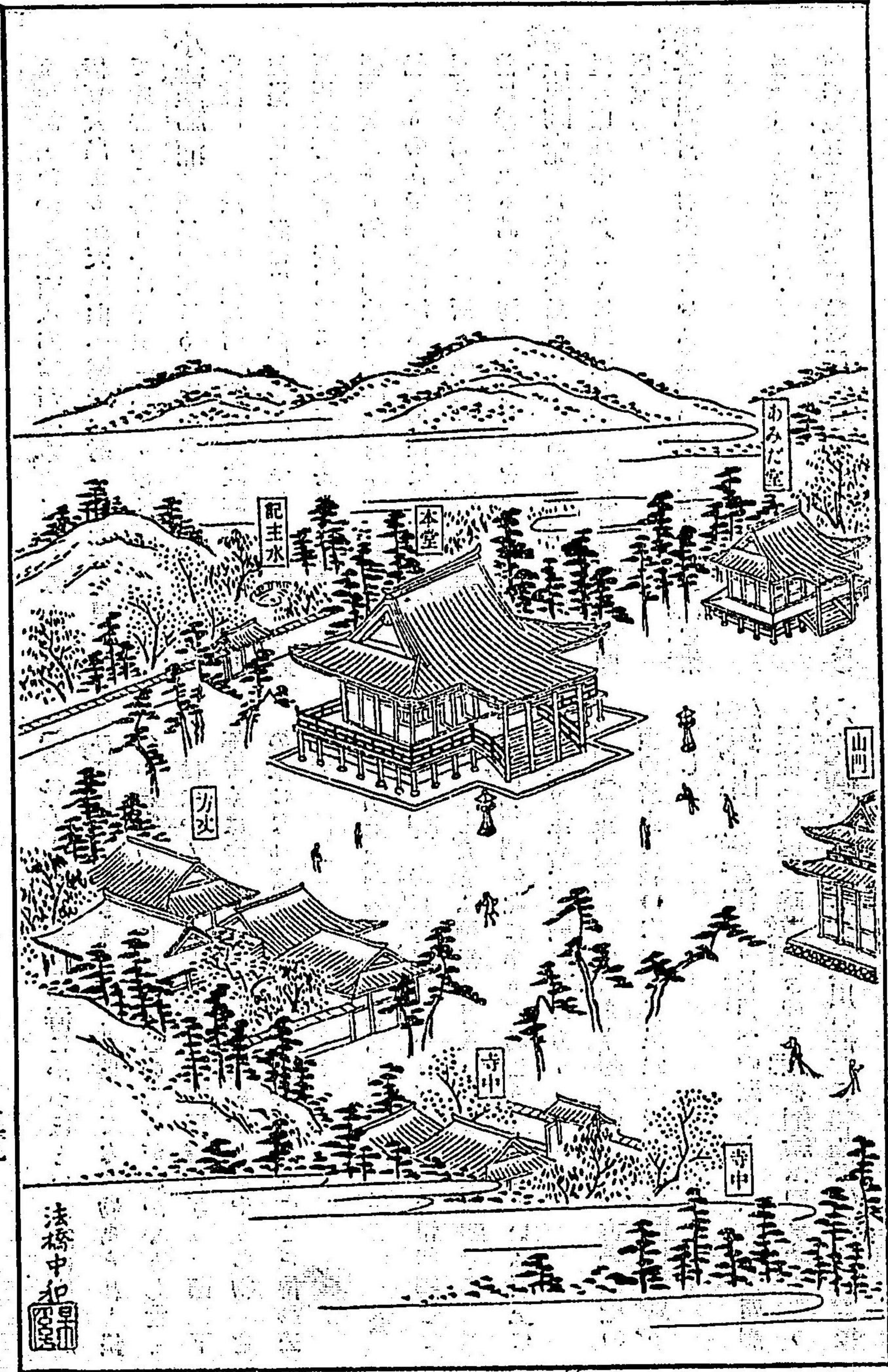
それ當寺は初佐介谷にあり後世こゝに移す本願は前武州大守平經時建立し蓮華寺と號し良忠上人を開山とす後に經時靈夢によつて光明寺と改む良忠の弟子

六人有て六派と成(京師の三箇は一條の禮阿三條の道光小幡慈心關東三箇は白旗の寂惠これ光明寺の第二世なり名越の道親これ大澤流の祖也藤田の持阿これ

を鎮西の六派といふ)當山關東十八檀林の本寺にして白旗流義也常に稱名の聲絶すして松の風靜に香煙梅に争ひ幽鳥雲を帯て佛堂をめぐる真に廬山青蓮社にも比せんや

六角井 光明寺の南飯島にあり同名鶴岡社内にもあり

光明寺



法橋中印

り里諺云むかし鎮西八郎爲朝弓勢をためしみると伊豆大島より此天照山へ遠矢を射る其矢十八里を歴て此井中に落る今に井中に鏝ありとなん

小壺鷺浦

飯島の東にあり漁家多し又小坪とも書す片濱にて風景の地也西南は萬里の波濤蒼天を浸し士

峰遙に見えて海に影し青山高からずして緑樹濃也此所鎌倉將軍家遊覽の地にして頼家公海上に船を浮べ

盃酒興に乗じ給ふ朝比奈三郎義秀水練の開えあれば船より飛んで海上に浮み數十度往反し波の底に入て

見えず諸人恠をなす所に生たる鮫三喉を引提御船の前

新居閻魔

由井濱大島居の巽にあり運慶の作應永大亂に亡魂弔ん爲こゝに造立しけり龜谷にも同名の閻

魔堂あり鎌倉漁村 材木座といふ亂橋の南の濱也村民漁を業

とす

萬葉 詠水江浦島子二歌

(上略) 水江之浦島兒之堅魚釣網釣杓及七日常用毛不來而下略

の如し寒暑に増減なく清澄の靈泉也鎌倉五水の其一つ也其五水とは金龍水。不老水。鏡洗水。日蓮乞水。梶原太刀洗水等也

文覺上人六代御前に叛謀をすゝめしゆゑ鎌倉へ捕へこゝにて誅しけり土人御最期川といふこれを又訛てゴサイ川と呼ぶ長門本には其時も駿州千本松原にて斬れ給ふと見ゆ又流布の平家物語に手越川にて斬れ給ふと書り

神嵩

櫻山村にありこゝに神武寺といふ天台宗の寺あり本尊藥師佛を安ず行基の作也嵩に天狗腰掛松あり時々奇怪ありて里人恐る

岩殿觀音

久野谷村にあり岩殿寺といふ本尊十一面觀音は坂東巡禮所第二番初めは行基中興曹洞宗の僧再興す

御猿島山

名越切通の北法性寺の山をいふ諺に日蓮上人鎌倉へ來り此窟に籠る諸人尊信せずして一飯をも贈らず其時山より猿多く來つて食物を供す後に法性寺を建立し猿を山王と祝ひ祭る年經て寺は荒廢し今窟に日蓮の石塔あり此寺京師今出河原にあり

日蓮水

名越坂一町餘南にあり日蓮上人通り給ふ時炎暑なれば水を乞給ふ忽側の坂道より涌出する事瀧

「つれづれ」 鎌倉の海にかつほといふ魚は彼さかひにはさうなきものにて此頃もてなす物也それも鎌倉の年寄の申侍しは此魚おのれらがわかへりし世までははかくしき人の前へ出る事侍らざりき頭は下部もくはすきり捨て侍じ物也と申きかやうの物も世の末になれば上さままでも入たつわざにこそ侍れ云

佛詣 目には背葉山郭公初かつほ 鎌倉 堂

守殿明神

森戸村出崎にあり三島明神を頼朝卿こゝに勧請したまふ例祭九月八日此所の生土神とす

「飛泚柏」祠の北にあり三島より飛來るといふ岩上に生たり「千貫松」祠の西にあり

「頼朝腰掛松」社の南にあり頼朝遊覽亭の古跡也社の西の岩上に柱の穴あり又泉水の蹟あり此濱に相思子多し

鑑摺山 多古江より杜戸への道にあり土人云頼朝卿三浦へ往返の時道狭きゆゑ鑑を摺給ふゆゑ此名あり

六代御前墓

多古江川の東にあり頼朝薨じ給ふ後

の如し寒暑に増減なく清澄の靈泉也鎌倉五水の其一つ也其五水とは金龍水。不老水。鏡洗水。日蓮乞水。梶原太刀洗水等也

「石井」名越坂の道南の谷にあり寺を長勝寺といふ日蓮宗京師本國寺の舊跡也日朗は尊氏の叔父たるによつて京師に移す寺内に岩を切抜たる井あり名泉にして鎌倉十井の其一つなり

安國寺 松が谷にあり日蓮宗寺内に窟あり日蓮上人房州より來てこゝに籠り立正安國論を編述し給ふ又寺前に妙法櫻といふ名木あり

佐竹屋敷 名越通の北にあり山勢扇の如くなる山の畔あり其麓に佐竹四郎秀義が舊跡あり文治五年七月頼朝卿奥州征伐の時此秀義も參陣す佐竹の旗は無紋の白旗也頼朝これを見て月を出せる扇を佐竹に賜り旗の紋に付べきよしを命せらる佐竹これより今に至つて五本骨の扇を家の紋とす

梶原第 五大堂の北際也梶原景時が宅地也傍に馬ひやし場の清泉あり

頼焼彌陀 金澤道の南にあり開基一逼上人藤觸山光

觸寺といふ 後醍醐帝宸筆の額あり光觸寺と書す

本尊阿彌陀佛の縁起に云むかし 順徳帝の時京都よ

り大佛師運慶來り來迎三尊佛を作る願主氏の局とい

ふ人これを敬信す又下部に萬歳法師といふ者あり此

者聊なる過あれば禁の爲傍輩なる者焼印を左の頬に

當る退いてみれば火印の痕なしあるじの氏の局これ

を聞て萬歳は無二の信者にて常に我持佛の本尊に詣

すとして見るに本尊の御顔に火印の痕ありこれを覆ふ

箔二十一重に及ぶといへども消すこれより一字を建

て本尊を安置しかなやき堂といふ此縁起二卷は亞相

藤原爲相卿記し給ひ繪は土佐將監光興なり此本尊の

事沙石集にも見えたり縁起と少し異也往て照らし見

るべし

梶原太刀洗水 朝比奈切通へ登る左の方にあり梶

原景時上總介平の廣常を討し時こゝに太刀を洗ひし

とぞ鎌倉五名水の其一つなり

朝比奈切通 鎌倉より金澤へ出る道也左右屏風を

とぞ鎌倉五名水の其一つなり

瀨戸の辨天 瀨戸浦にあり海中へ築出したる島に

鎮座す頼朝卿の御臺政子前江州竹生島辨天をこゝに

立たる如く高さ五丈許山を切通したる也道の北の方

に『鼻吹地蔵』あり相州武州の國界也鶴岡よりこれま

で二里又金澤へも二里也

侍從川 朝比奈切通の東六浦の入口にあり俗傳云照

天姫の乳母侍從といふ女身を沈し川といふ

六浦川 六浦村にあり南方は海なり此邊鹽屋多し風

景の地なり

金龍院 金澤道の東南にあり本尊虚空藏菩薩開山方

崖和尚此地の東北瀨戸までを引越村といふ

『飛石』金龍院の後山にあり高一丈餘廣九尺三島明神

此石上に飛來し給ふといふ金澤四石とは飛石。福石。

美女石。姥石等也

瀨戸明神 瀨戸村海道の側にあり治承年中頼朝卿こ

こに勧請す

『祭神大山積命』三島と同神也鳥居額正一位大山積神

裏書に延慶四年辛亥四月廿六日沙彌淑尹

瀨戸の辨天 瀨戸浦にあり海中へ築出したる島に

鎮座す頼朝卿の御臺政子前江州竹生島辨天をこゝに

金澤文庫古蹟 當寺境内阿彌陀院の後也今空地と

なるむかし北條越後守平顯時こゝに文庫を營て和漢

の群書を藏め儒書には黒印佛書には朱印を押す其印

は楷書にて金澤文庫の四文字を豎に書す其後上杉安

房守憲實執事の時再興に及ぶ

〔鎌倉大草紙〕武州金澤の學校は北條九代の繁昌の

時學問ありし所也又上州足利の學校は承和六年小野

篁上野の國司たりし時の建立也今度安房守憲實足利

は公方家の地なれば學寮を建て領地を附し諸書を藏

め學徒を憐愍すされば此頃諸國大に亂れて學道も絶

たりしかば此金澤の文庫を再興し日本一所の學校と

す西國北國よりも多く聚ると云々これは 管領源

成氏の時也其後又大に頽廢して書籍もみな散失し文

庫も只名のみ残り京師の大學寮にも比せんや

親金澤藏書而作

玉帳修文 諸武餘 遺人米 覓齋藏書

牙藏映日 親餅斗 經杖乘時 走蓋魚

地上一編 看不足 鄭侯三萬 欲何如

照心古教 君家有 取在胸中 歷五車

堂

照心古教 君家有 取在胸中 歷五車

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

堂

金澤
能見堂
擲筆松



題画山水
絕津無客跡
隔岸有人家
此中堪沒世
山水足煙霞

服元齋



『青葉楓』堂前の東にあり爲相卿鎌倉にありし時和歌を詠す

いかにして此ひとものしくれけん 爲 相 卿
山にさきたつ庭のみみち葉

△此歌より後は玄冬まで青葉にてありしが今枯てなし

『西湖梅』むかし商船抗州西湖より持來りこゝに栽る今は枯てなし

『櫻梅』堂前の東にありしが今は枯てなし『文殊櫻』寺中にあり初めの木は枯て今は新木の栽繼なり

『普賢象櫻』寺内にあり千重也『黒梅』今は枯てなし

已上當山の六株瀬戸社の白檜。雀の浦の一つ松これを都て金澤の八木といふ

『美女石』姥石』共に當寺蓮池の傍にあり金澤四石の内也

『御所谷』當山阿彌陀院の後の切通しを出る島をいふ里諺にむかし 龜山帝こゝに遊歴し給ふ行宮の古跡といふかの帝行幸の事さだかならず

『北條顯時塔』阿彌陀院のうしろにあり『北條貞顯塔』同所にあり顯時の子也

明神。辨天祠。手子祠。寺は稱名寺。太寧寺。善雄寺。藥

王寺。龍華寺。圓通寺。金龍院。松は照天松。村君太夫

が夫婦松。君が崎のひとつ松。雀浦の孤松。金澤四石。

八木は世に名高し井は龜井。染井。白井。赤井。大井所

小井所。の七井。亭は四望亭。九覽亭の二亭あり。里は

釜利屋。刀切。洲崎村。町屋村。六浦村。瀬戸村。谷村。

室木村。野島村。柴崎村。引越村。乙臘村。大同村。山は

鎌倉山に續て遠近の連山綿々たり安房上總のあひだ

の鋸嶽。三浦の二子山。名にしおふ行衛もしらぬ我思

ひと詠せられしふじの高根も此濃見の筆捨松の葉こ

しより遼に見えわたり海は堅魚とる鎌倉の海につら

なり波瀾渺々として「水やそら空や水とも見えわか

ずかよひてすめる秋の夜の月」と清輔の詠め給ひし

もこゝに思ひあたる過にし延寶の比中華の沙門東卓

心越禪師と聞えしが水府公に召れてこゝに來りかの

國の西湖瀟湘の景勝に似たりとて八首の詩を咏す然

れば萬里の海を渡すして中華の風色を眼前に見るの

勝邑なるべし

抑當寺は金澤の古刹にして名高し往昔 龜山帝の勅願所にして開基は審海和尚本願は北條越後守實時也
稱名寺殿 北條家繁昌の時は伽藍巍々たり年歲累りて金澤文庫も頽廢し佛堂も苔を封し只寂寥たる古名刹なるべし

能見堂 稱名寺の西北にあり擲筆山地藏院と號し本尊地藏尊を安す今の堂は久世大和守源廣之の建立なり

捨筆松 堂前にあり諺云むかし巨勢金岡此地に來りてこゝの風景を寫さんとて筆をとりしに眞妙の美こころのまゝならずとて此松の下にて筆を投捨しと也

此堂上より風色の妙なる際りなく見ゆるゆゑ能見堂の名あり又土人云金岡こゝに來り風景の美を見て惘

れてノツケにそりしゆゑノツケン堂といふとぞ

夫此堂上へ登りて遠望すれば東南には安房上總の峰峰眼下に遮り近く見れば瀬戸洲崎の入江撫くむ海人

藻を刈賤女。瀬戸橋の行人。島は烏帽子島。猿島。裸島。野島。夏島。浦は六浦。三浦。葛浦。浦江。社は瀬戸

〔梅花無盡藏〕出金澤七八里許攀最高頂。則山々水水面々之佳致昔畫師金岡絶倒擲筆之處有名無基但其名不甚佳。相傳曰濃見堂也。又云畫師擲筆之峰。

萬里居士

登々仙留路攀高 泉集大成忘却勞

秀水奇山雲不渡 畫師絶倒擲筆時

△上件之鎌倉金澤は東海道を隔て二里餘也。已下は又元の東海道を立戻りて藤澤の驛より直に江戸に至る

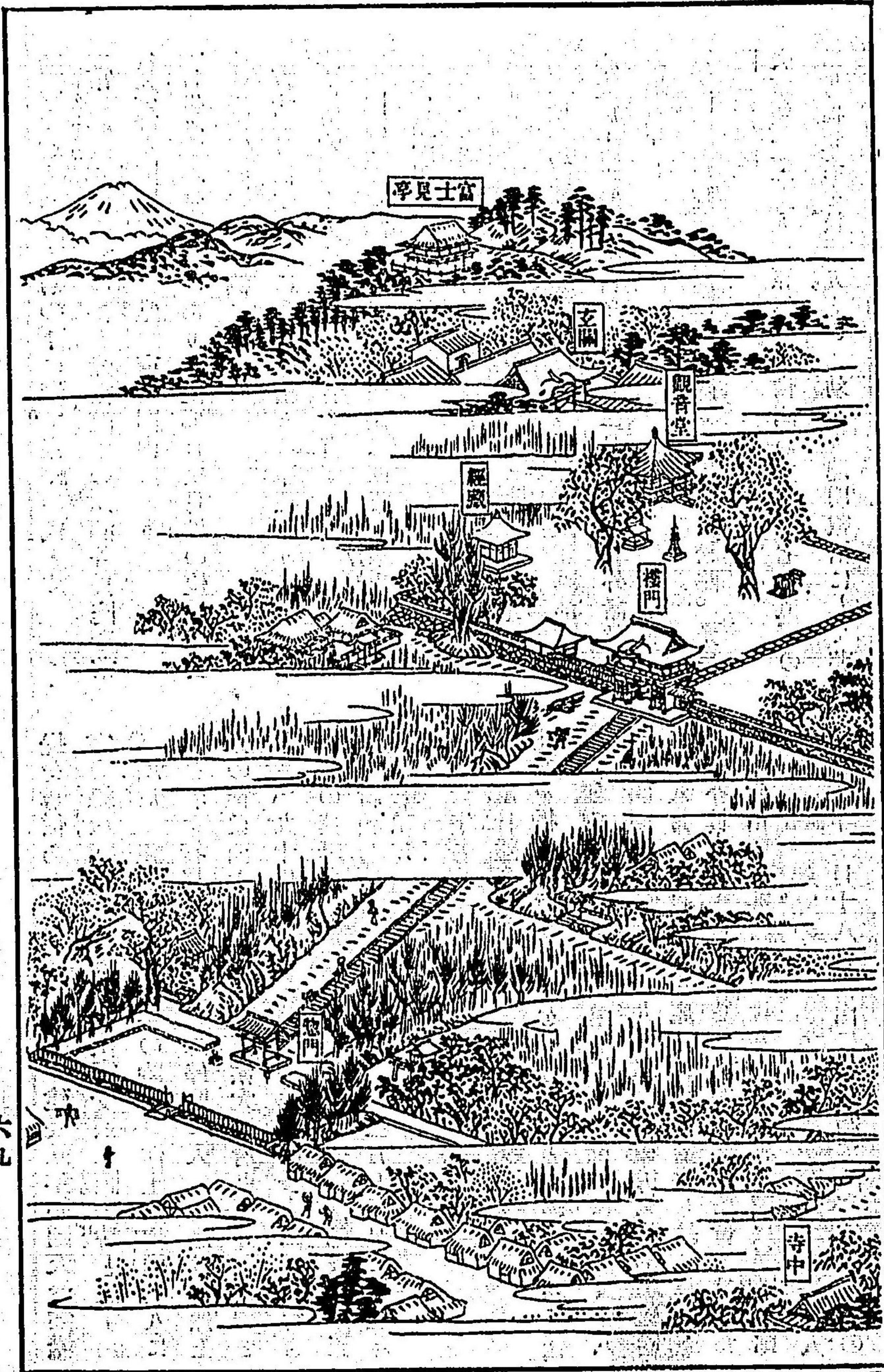
藤澤 戸塚まで登里三十町也驛中に白旗明神といふあり延尉源義經を祭るといふ別當を眞言宗莊嚴寺といふ此宿の生土神として例祭六月廿一日也又同驛

に八王子祠あり土人云武藏坊辨慶を祭也とぞ兩祠とも由縁詳ならず

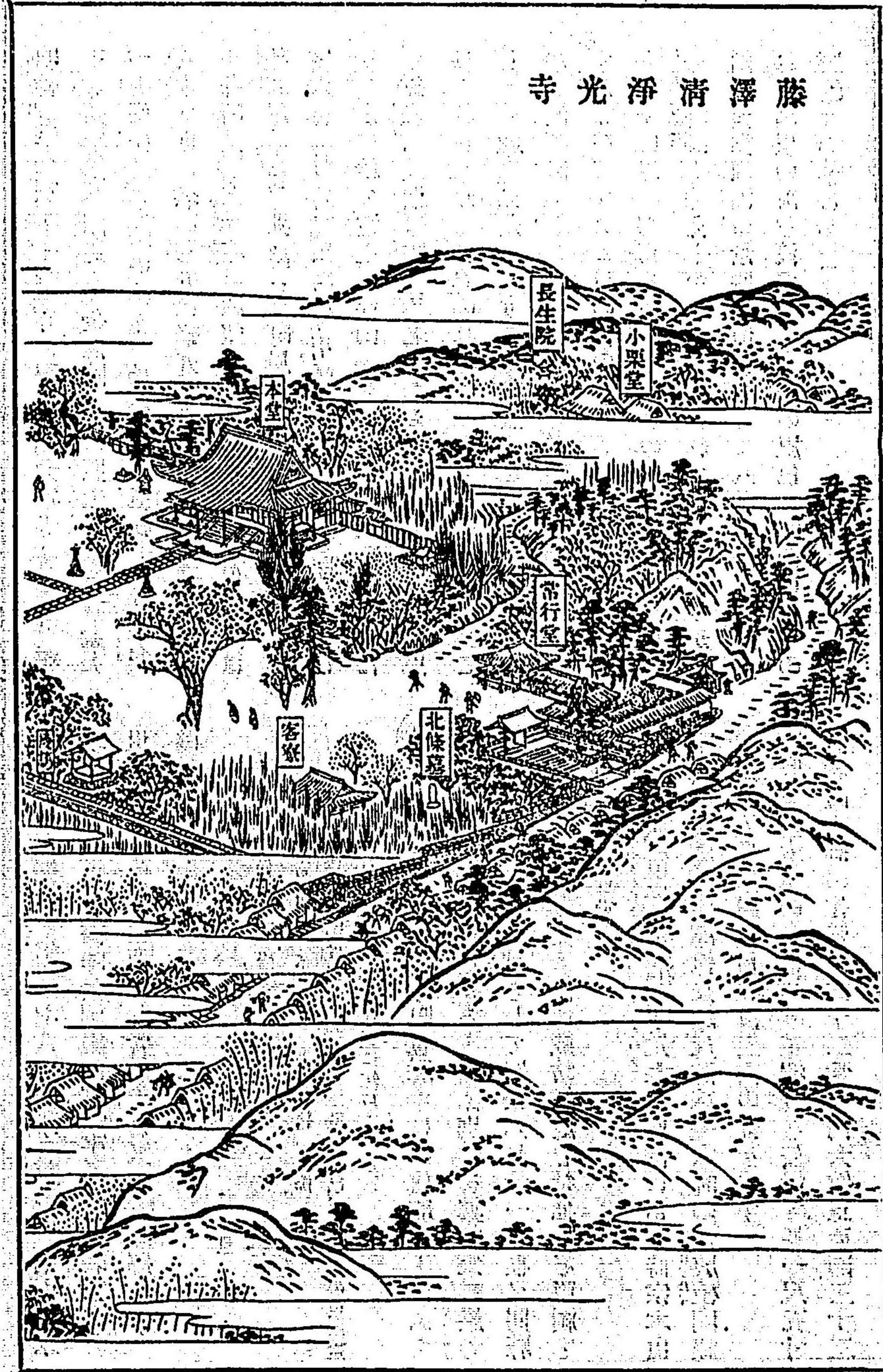
藤澤山無量光院清淨光寺 藤澤にあり時宗本山

『本尊阿彌陀佛』座像長四尺許慈覺大師の作脇檀開祖一邇上人像第四代目吞海上人の像を安す

『觀音堂』本堂の左にあり正觀音を安置す長一尺五寸許智證大師の作當山四十二世南門大僧正西國三十三



藤澤清淨光寺



所の土をもつて本尊の下に埋て巡禮の代とす

『常行堂』本堂の右にあり光岳院といふ酒井長門守常行念佛を開闢す『鐘堂』南の門内にあり

『日供堂』本堂の側にあり諸檀那日供月供の位牌を安す『經藏』觀音堂の側にあり

『方丈』日供堂の北にあり此續きに庫裡あり『富士見亭』方丈の上方にあり額清音と書す

『山門の額』藤澤山と書す勅額從二位藤原基時卿の筆裏書貞亨四年丁卯仲冬日

『北條家墓』南の門内にあり『當山累世墓』開基遊行上人より五十三世まで並に藤澤三十三世までの墳あり

『南部右馬頭茂時墓』同所にあり教淨寺殿正阿清空天心大居士正慶二癸酉年五月廿二日と鐫す其外諸侯の墳墓多し

『子院』眞淨院。栖徳院。眞光院。善徳院。貞松院。光岳院。長生院。

夫宗祖一邇上人は原俗姓伊豫國領主河野七郎道廣の二男也童名を松壽丸といふ幼より聰明敏悟にして著

提を尊信あり 後深州院御宇建長五年同國天台宗繼

宗寺縁放律師を師として出家受戒し隨緣坊と號す五

歳厥后 龜山院文永元年の時廿六 淨土宗聖達上人に

隨ひ名を智眞と改て易行念佛門に入(聖達は法然上人の徒弟西山證空に隨ひ筑紫大宰府弘西寺の住職となる)九十年代 後宇多院建治元年の冬十二月下旬より紀の熊野山本宮證誠殿に一百日參籠念佛安心の正路を祈願し給ふに翌る建治二年三月廿五日大權現示現の願に曰

六字名號一邇法 十界依正一邇法
萬行離念一邇證 人中上々妙好華

此文を得悟の時より名を一邇上人と改給ひ神勅に任て南無阿彌陀佛 決定往生札を國中の庶民に賦算す十八年の間回國修行し給ひ九十二代 後伏見院御宇正應二年八月廿三日攝州兵庫津に於て遷化し給ふ(年五十歲今眞光寺といふに墓あり攝州名所圖會に見えたり)當山の開基は第四代吞海上人も本願は俣野五郎景平 阿彌 起立の資助ありて當寺を草創す吞海上人嘉曆二年二月十八日當山にて入寂す 年六十三 第十二代の

の内三疊目にて龍顏を拜し奉れり尊親法親王應永四年の春回國修行の事 後小松院被達 叡聞 足利三代の將軍義滿公へ勅命有て當代遊行上人は南朝即位の皇子たるによつて順國の事等閑ならず於國々守護人 止宿夫駄の煩なく賄賂擬應可 應氣色 旨官領職斯波左衛門佐義將承之守護人へ仰出さる 又足利四代將軍義持公より遊行十四世の太空中人回國御教書其文に云

清淨光寺 遊行金光寺 遊時衆往反人夫馬與諸國上下之事關は渡以 押手判形 無煩可 勘過之旨 所被 仰付國々守護人 也若於 違犯之在所 者就 註進 可 處 罪科 之由所 被 仰付 也仍執達如件

應永廿三年四月三日 官領沙彌判

此書同文にて足利將軍代々賜り其後織田信長豊太閣等の御教書をもつて遊行三十三世滿悟上人法流を繼て越後國北條村といふ所より當寺へ歸國の時秀吉公より下し書其文云

藤澤上人御歸國之條傳馬宿送等無 異儀 可 有 馳

寺職尊親法親王は龜山院第四の皇子也 後醍醐天皇延元元年和州吉野山へ皇居を遷し給ふ南朝二代 後村上帝春宮これなきによつてかの第四の宮を儲君となされ南朝第三代の即位あり然れども其頃宮方微にして吉野十八郷尊氏の兵威に恐れ宮方に隨ず遂に第四宮は遊行八世渡船上人の御弟子と成給ふ 此時御年延文五年より應安元年まで九ケ年の間藤澤山に御在山應安二年より永和二年まで八ケ年の間攝州兵庫津眞光寺に御住職永和三年より至徳元年迄八ケ年の間羽州山形光明寺に止錫至徳二年より二ケ年の間甲府一蓮寺に御止職嘉慶元年二月廿六日より海内遊行し給ひ時宗十二代目を相續まし 尊親上人と號す諸國修行の間十四箇年于時應永三年の秋上浴まし 百一代 後小松院御宇皇胤の山緒に依て參内有て玉座の御左に着座ある南朝の御裔流なれば 後醍醐天皇の宸影並に御宸翰醍醐小野宮隨心院 尊親法親王より遊行尊親上人に御授與し給ふ此由致によつて遊行十三世上人より已後は代々繪旨頂戴參内の格式小御所埋圖

走一者也仍如件

天正十七年九月七日

真江兼續判

其外御當家よりも御代々御印物多し又徳川徳阿彌有親公の御願書當山の什寶とす

第十二世尊親法親王他阿上人より雲井までも宗風を耀し又四十二世南門大僧正は和州吉野山に越て後醍醐帝の遠忌三百五十回を修行し追福の歌に

昔の下埋れの名はみよしの
山より高き君かみさき

遊行尊任僧正に遇たりし時圓圖のあり
さまなごかり給ひしに

外國をめぐるは法のためなるを

西川嘉長

かへし

よそめにはいかにも見よ世をすくふ 遊行上人
法のためにそめくる國々

宗祖一逼上人より今五十三世までも普く萬國を順りて阿耨菩提の種を樹しめ給ふ事歳月久しく既に五百餘歳に逮り末世の凡卑三寶の法味を甘んじ三心四修をえらばす即心即佛の法糧となさしめ遊行の一つ火の奇特を現しかの熊野大權現の靈告の神札を授け給

ふ事は己身の彌陀唯身の淨土の通り符契なるべし
小栗堂 藤澤道場の東一町にあり子院の中にて長生院といふ小栗満重像八十地蔵尊惠心の作これは照姫の守佛といふ閻魔王像小野篁の作又傍に小栗拾人原の古墳あり

「什寶」鬼鹿毛崇寧通寶の所持天狗爪古鏡草橋棟

「小栗傳」小栗が事年久しく人口に膾炙すといへどもいまだ正説を聞ずある草紙に云人皇百二代稱光院の御宇將軍足利義暈卿の時應永三十年の春常陸國の住人小栗孫太郎滿重といふ者謀叛の聞えありて鎌倉官領の下知に隨す左兵衛督源持氏かれを退治の爲鎌倉を出陣して結城に到り八月二日より小栗の城を攻る

小栗も兵を出し防ぎ戦ひけれども鎌倉勢荒手を出し手痛く責ければ防戦かなはず小栗は城を棄て行方しらす落行けり後に遠州に在といふ其子小栗小次郎は忍んで關東にありけるがある時相州權現堂といふ所に泊りけるが其邊の強盗ども聚りけるに宿のあるじ云けるは今夜の止宿の浪人は常州有徳の人也隨身の

財寶多し家來十輩ばかりありいかいせんといふ一人の賊云討入奪ひ取事も安けれと騒しければ毒酒を飲せて一度に殺せよといふ此義究竟の計と用意し小栗を馳走の体にもてなし宿々の遊女をあつめて酒宴を催しける酌に立たる照天といふ遊女頃日小栗に遇馴しが淺からぬころより毒酒の事をひそかに告る小栗心得て飲体にして且て吞すありける家人どもはこれをしらすして酔臥たり小栗は假初に出る林にて座をたち近き林の中にかくれ行見るに鹿毛なる馬を繫き置けり賊等往來の武士の馬を盗て來りけれども荒馬にて人を喰ひければ詮方なく此林の中につなぎ置たり小栗小次郎は音に聞ゆる馬上の達人なれば忍びやかに財寶を隨へかの馬に打乗り鞭を揚て片時の間に藤澤道場へ遁れ行御寺を頼むよしなれば上人あはれみ暫し隠し置遠州へ送らさる又毒酒に中られたる十輩ばかりの家人も上人あはれみ給ひ六字の名號を湯に入吞し給へば熊野權現の利生にやみなく蘇生してかの盜賊を搜出し誅しけり其後永享の頃小栗遠

小栗小次郎は鎌倉權現堂にて強盜に出會ひて毒酒にて殺さるべしと遊女照天が誘ひ出竹林の荒馬に乗藤澤の道場へ遁入危念の難を逃れけるこれ馬上の達人にして正清が鎧陣泥を惜むの如にうらす



州より來り照天を尋ね出し多くの寶をあたへ遠州へ連歸りけり世に照姫といふは此遊女照天の事なるべし一説には小栗兼氏といふ者頼朝の時代蒲冠者頼頼の旗下に屬して遠州の國主たり小栗系圖には孫五郎平滿重其子小次郎助重とあり又云小栗の末葉今に於て遠州天龍川の西笠居の近郷石原村に小栗玄節及び近村に同姓殆多し又藤澤小栗の縁記には右に少し異也上人の仁慈にて熊野温泉にかの小栗の十人原を車に乗て送られ毒氣平癒奇瑞利生の多き事を書り又照天松とて金澤にあり何れか其是非分明ならず

相模 程谷まで貳里九町鎌倉繁華の時は材木町也此驛より海道筋大略南北也北の方をもつて江戸に當る宿中北の町端れに吉田橋といふあり江島鎌倉道也鶴岡へ貳里長谷觀音へ貳里半

武藏相模の國堺 境木村と云左の方に地藏堂あり

武藏 神奈川まで壹里九町むかしは程谷。新町。帷子とて三宿なりしを慶長二年一驛となるこれより金澤鎌倉へ行道筋右の方にあり金澤能見堂まで三里餘

也道よし

芝生村窟 芝生村の左の方に淺間祠あり山腹に窟あり土人訛てぶじの人穴といふ

武藏 川崎まで貳里半此宿は船着にして旅舍商家多く繁昌の地也神奈川峯とて風景の勝地にして申西の方に富士山見ゆる右の方海邊に出崎あり本牧十二天の森といふ稻毛辨天祠あり沖を本牧の沖といふ又驛中に飯綱權現祠。熊野權現祠あり又驛の北端に浦島寺といふあり本尊正觀音浦島が守佛といふ長壹寸八歩古は眞言宗今淨土宗となる寺説云むかし浦島が子龍宮より歸りし時親の靈魂を尋んとて東の方へさすらへ箱根山にて玉手箱をひらき老翁となりこゝにて親の廟所に尋あたり此地にとまりけるとぞ又浦島足留の所もあり今西運寺といふ又龍燈松といふもあり

武藏 品川まで貳里半これより南廿町許に遠藤村といふありこゝに石觀音といふ雲佛ありて毎月十八夜村中堂内に入て通夜す

大師河原平間寺 武州橋樹郡川崎郷大師河原村に

あり眞言宗新義別當を金剛山金成院といふ

『本尊弘法大師像』長五寸堂内に愛染明王不動尊を安す側に太子堂あり聖德太子を安す鐘堂本堂より右にあり近年新に鐘を鑄て堂前にかくる當寺の尊像は厄除大師といふ寺説に云むかし大治年中此浦に平間氏といふ漁父あり生國は尾州の者にして年久しく此浦に住す生質正直にして常に三寶を尊むといへども家窮て貧しく漁を産業として世をわたる年齡四十二才の時ある夜高僧來つて平間に告て云われむかし在唐の時自像を作り我日本有縁の地に流れ止まるべしとて海上へ投る年久しく海底に沈溺して今幸に此浦に來る汝これを漁してこゝに安置せば厄難を除滅し永く富貴の身となるべし其海上のしるしには毎夜潮に光明ありこれを標として漁すべしとて夢覺ぬ平間大に感嘆して光を尋て網をおろすに大師の尊像を得たり忽然として四方の民俗來つてこれを拜す故に一宇を登て平間寺と號し村の名を大師河原といふ當院に

大師河原平間寺



三點の秘封といふ物ありこれを眞言秘密と稱して大師の相傳とす

玉川 六郷川の本名也又多摩とも書す多摩は武藏の郡名也六玉川の其一つにして古詠多し又入間里にては入間川といひ海道條にては六郷里なれば六郷川といふむかしは大橋あり武藏國三大橋の其一つ也長さ百九間ありといふ洪水に度々損するゆゑ元録年中より船渡しとなる又此河上より水道を作つて樋をふせ江戸京橋より南の人家の用水とす

矢口渡口 六郷の河上にあり矢口村の農作のわたし
也又戸田のわたしといふもあり又矢口の上に小手指
原玉川の里三吉野などいふ所あり

新田明神祠 矢口村にあり六郷より十五町許西の

方也新田左兵衛佐義興の靈を祭る又傍に義興并に家
臣等の古墳あり墳の廻りに大竹を生ずこれを取れば
崇ありといひ傳ふ別當を興福寺といふ眞言宗これを
守る

〔太平記大意〕新田左中將義貞の二男に左兵衛佐義興
として器量尋常に勝れ智勇武畧の名將あり父義貞戦死
の後も爰かしこにて合戦ありしかども無勢にして勝
利もなく上野國に整居し時々武藏國に越て相州鎌倉
を窺ふよし聞へければ鎌倉管領足利基氏いかにもし
て討むと計るといへども曾て居所を定めず基氏ひそ
かに竹澤右京亮を招て折て討べきよしをいへりそれ
より竹澤は鎌倉を背きたるよしを偽りて義興に同意
すされども義興は竹澤が心底を疑ひて心をゆるさず
竹澤謀をもつて京都より何の少將殿とかやの息女十



武藏國佐野郡
にあるゆき玉
川といふ六つ
玉川の其一つ
にて義興にも
古跡あり今は
六郷村の中な
れば俗に六郷
川とよぶ又河
上入間里にて
は入間川とも
いふ也

七にならせ給ひて容顔美麗なるを申下し義興に奉る
さすがに義興も好色に迷ふならひなれば借老同穴の
契り淺からず竹澤を無二の味方と思ひ給ふ天運の程
こそかなしけれ斯て竹澤はさまざまに方便をめぐら
し計るといへども一人しては叶ひがたくや思ひけん
重て江戸遠江守を望み兩人義興の味方と成て種々の
謀を巡し延元三年十月十日矢口の渡りにて船の底を
うがち鑿をさし込置て義興一族十三人密に渡る時鑿
をぬき船を沈めたり具し給ひし井彈正義興を宙にさ
し上げれば義興大音聲にて日本一の不道者に忻れぬ
る口惜さよと牙を嚙自害して底の水屑と成にけり江
戸竹澤共に恩賞に預り其後江戸遠江守本國に歸ると
て此矢口の渡りに到る時に義興の怨靈あらはれ出て
雁俣をもつて射ると見えしが山河震動し黒雲一村江
戸が首の上に落ると見えしが江戸は馬より逆に落た
りける夫より重病をうけ水に溺るゝまねをして終に
狂ひ死にぞ死にける是のみならず入間川の在家三百
餘宇一時に灰燼と成義興の討れし矢口の渡りに夜々



新田義興は竹澤右京
亮江戸遠江守が森計
に欺れて矢口のわた
しにて亡されける其
靈魂とまりて江戸
がかへるさ靈鬼袋中
より現れ取救しける
今新田明神と崇祭る
は此義興の靈魂也
江に屈平を祭り香奠
を大草府に集め奉る
も同様と思はれける

光物出てゆき、の人を惱しける間近隣の村老聚りて
義興の亡魂を二社の神に崇めつゝ新田大明神とてと
きはかきはの祭禮今にたえずとぞうけたまはるふし
き成りし事共なり云々

玉川辨天堂 六郷川東端羽田村にあり別當龍王院
此地海濱の洲崎によつて江戸より見れば海中の島と
見ゆる也

八幡宮 八幡塚村にあり此所の生土神とす例祭六月
十五日神輿を船にて玉川を渡す別當寶珠院

大森 村の名とす此所に和中散の藥店あるひは麥葉
細工の店多し

長榮山本門寺 在原郡千束郷池上村にあり日蓮宗
塔頭三十八宇

『本尊釋迦佛』運慶の作本堂に安す『祖師堂』祖師日蓮
上人の像を安す弟子日法上人祖師存在の時移し作る
也當寺は高祖日蓮上人の開基也往昔上人房州小湊よ
りこゝに來り番匠宇左衛門尉宗仲が家に來り法華經
を説て宗意を弘通しある時弟子達を聚て宣ふは我既



に衆生利益の化縁満たりとて弘安五年十月十三日に
遷化し給ふ即宗仲も上人の弟子となり家を轉じて寺
となせり今寺中の内大坊これ當山の封境巍々とし
て五重塔。題目堂。二王門。總門共に額は光悅の筆也
其外七面祠。鬼子母神。妙見堂。骨堂。寶藏。祖師の御
塔。御硯石。祖師腰掛松。千束池は長三町に横五十間
あり此地は高祖遷化の古跡にして一宗の名刹也
『什寶』註書法華經(日蓮自筆)紫色石(天竺靈鷲山よ
りわたる)日蓮自筆帳。同念珠(一連)同消息數通。同
肉付齒

荒蘭崎 川崎より品川までの舊名なるべし笠島も鈴
が森のほとりをいふ

萬葉 草かけのあらるの崎の笠島を
みつゝや君か御坂のゆらん

續後 白波の荒蘭か崎の磯松
かはらぬ色の人そつれなき
源 家 長

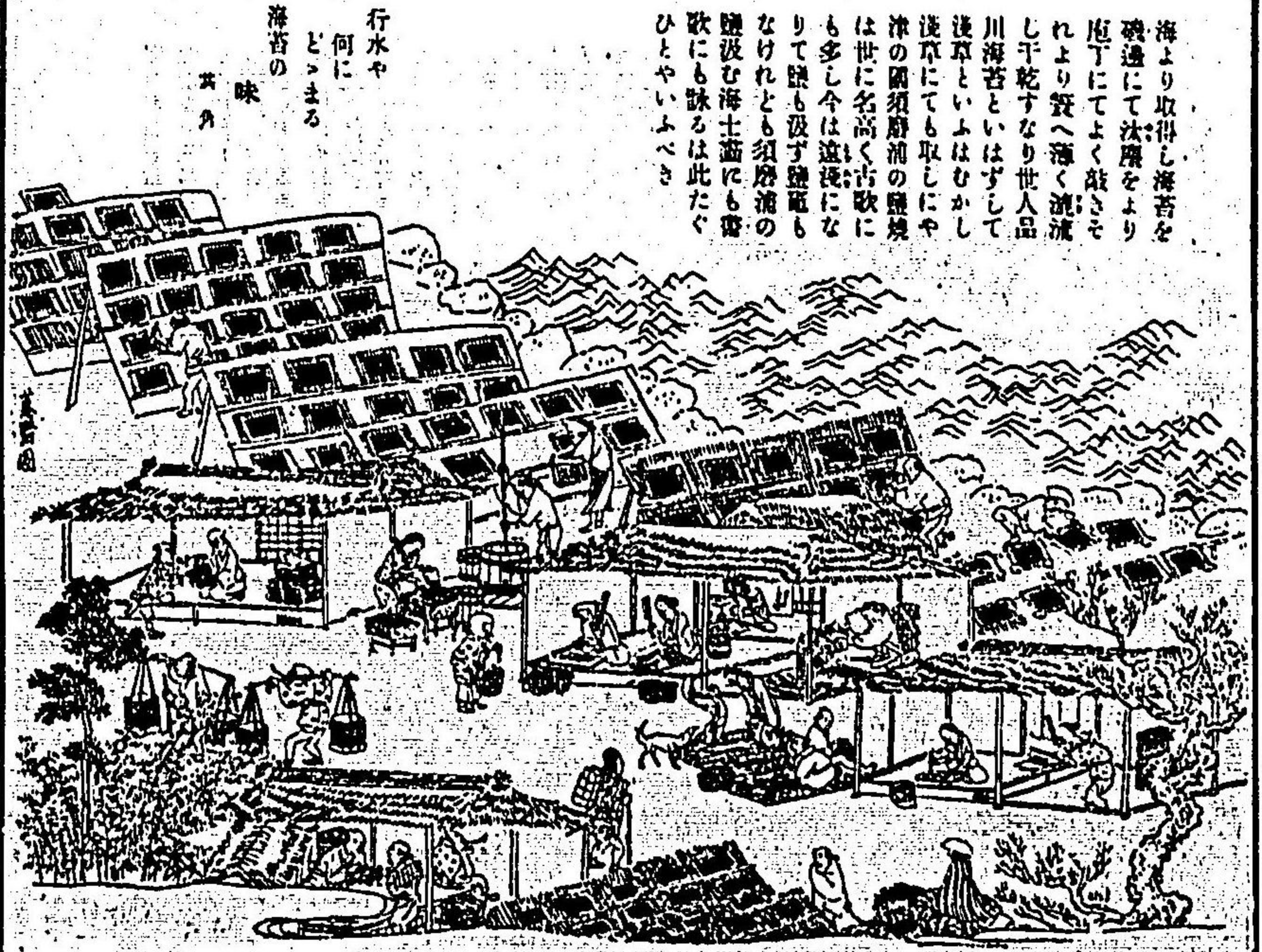
紀行 蘆まじり生ふるあらぬの打なひき
波にむかへる岸の松風
准后 道 興

名産荒蘭海苔 大森邊より品川の沖にて取る也世
にこれ淺草海苔といふむかしは淺草のほとりにて



も取しにや
 此海苔を取は秋の彼岸より始りて春の彼岸に終る霜
 月臘月など寒氣凜冽なる時取を最上とす柴といふも
 のを多く絡げて小船に積沖の方十町許或は廿町又は
 一里餘も出て狼牙棒にて海底に穴を堀てかの柴を指
 こみ置これをヒといふ満潮に海苔これに纏ふ干沙
 の時分には浅き所は歩行にても出深き所は船にて通
 ふ其海苔を籠に入持歸磯邊にて汰流し塵など撰て板
 の上にて庖刀をもつて細密に敲くそれより葎の簀へ
 紙を漉やうに汰流し蕪に双べ干乾し疊重ねて浅草町
 の海苔問屋などへ賣世世の人荒蘭海苔といふべきを
 浅草海苔といふは浅草も海藻の類に通ふにやあらん
 鈴杜八幡宮 鈴森にあり舊名延喜式云磐井神社祭
 神石清水勸請例祭八月十五日社内に鈴石といふあり
 磐は鈴の音聞ゆ神寶とす末社五前。稻荷。大國主命。
 猿田彦命。辨財天。一色靈神又笠島祠に六前。天滿
 神。鹿島。粟島。辨天。菊理姫命。書聖王右軍等を祭る。
 社司森田氏守る。

海より取得し海苔を
 磯邊にて汰塵をより
 庖下にてよく敲きそ
 れより簀へ漉く流流
 し干乾すなり世人品
 川海苔といはずして
 浅草といふはむかし
 淺草にて取しにや
 津の國須磨浦の鹽燒
 は世に名高く古歌に
 も多し今は遠淺にな
 りて鹽も汲ず鹽重も
 なけれど須磨浦の
 鹽波む海士面にも書
 歌にも詠るは此たぐ
 ひとやいよべき



「磯馴松」社前にあり神木とす
 「鳥石」本社傍にあり大さ三尺餘石面に鳥の模形あ
 り五寸許石色青く鳥形黒漆のごとし石の左肩に碑あ
 り南郭子銘す書は古篆にして鳥石葛辰鑑す石前に聯
 あり下圖のごとし

品川 日本橋迄二里品川より北の方神社佛院は舊書江
 戸鹿子。江戸砂子。江戸名所大全。江戸名勝志等
 に委ければ詳に記する事なし姑寛文年丁意子の著し
 たる名所記の要文を省畧して其二三を茲に記すのみ
 品川の驛は東都の喉口にして常に賑しく旅舎軒端を
 つらね酒旗肉肆海莊をしつらへ客を止め賓を迎ふて
 糸竹の音今様の歌艶しく渚には漁家おほく肴わかつ
 聲々沖にはあごと唱ふる海士の呼聲おとづれて風景
 足らずといふ事なしこゝは東海五十三次の館驛の首
 たる所なるべし

水月觀音 品川にあり海照山品川寺普門院といふ開
 基は弘法大師年久しく廢して草堂なりしを法印權大
 僧都弘尊中興す



新秋の海苔名雨
 傳降茶海飲森風

明和元年八月 藤定福
 右ハ梅小路三位参議足福卿

御殿山
天王社



西島寫

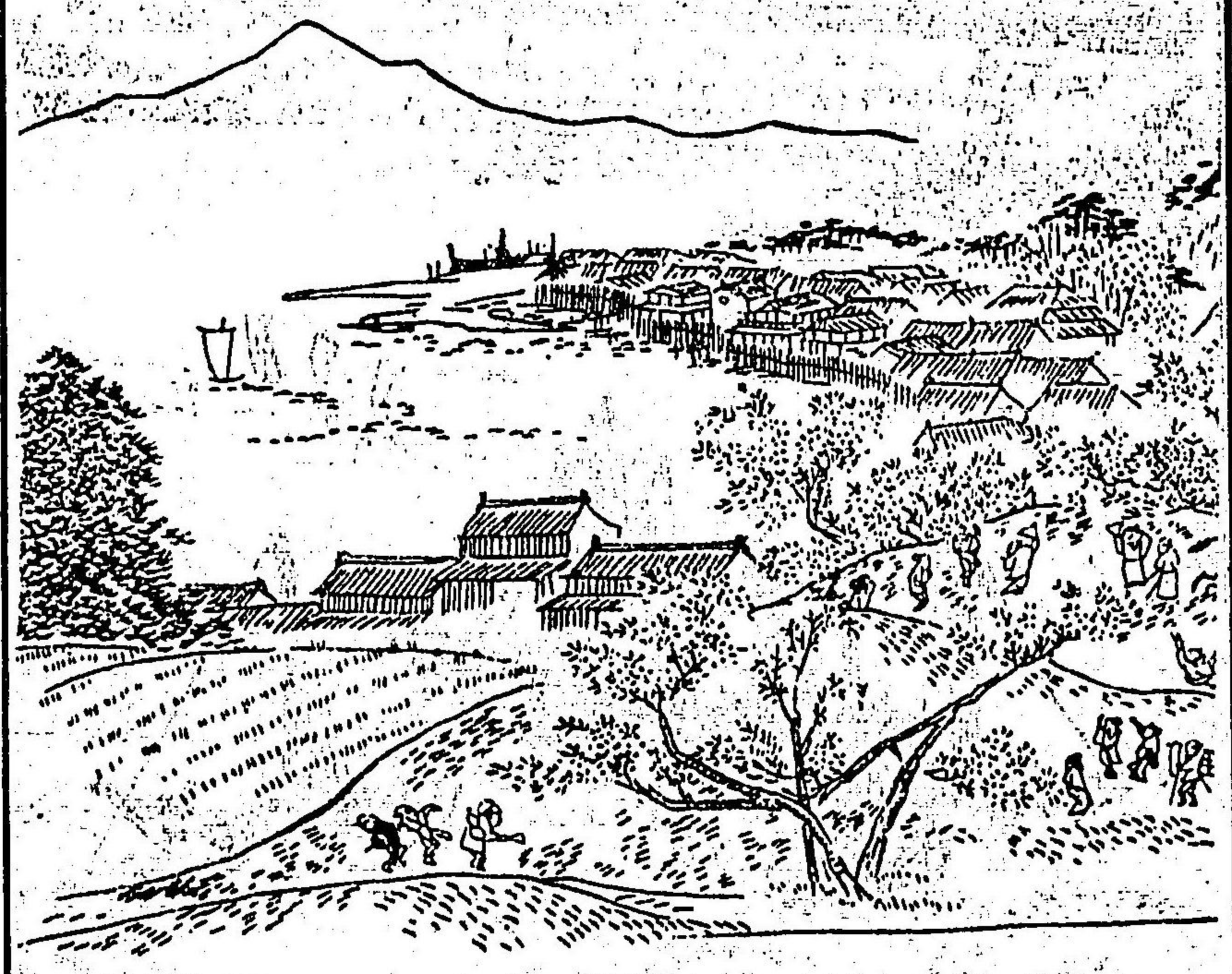
拾遺

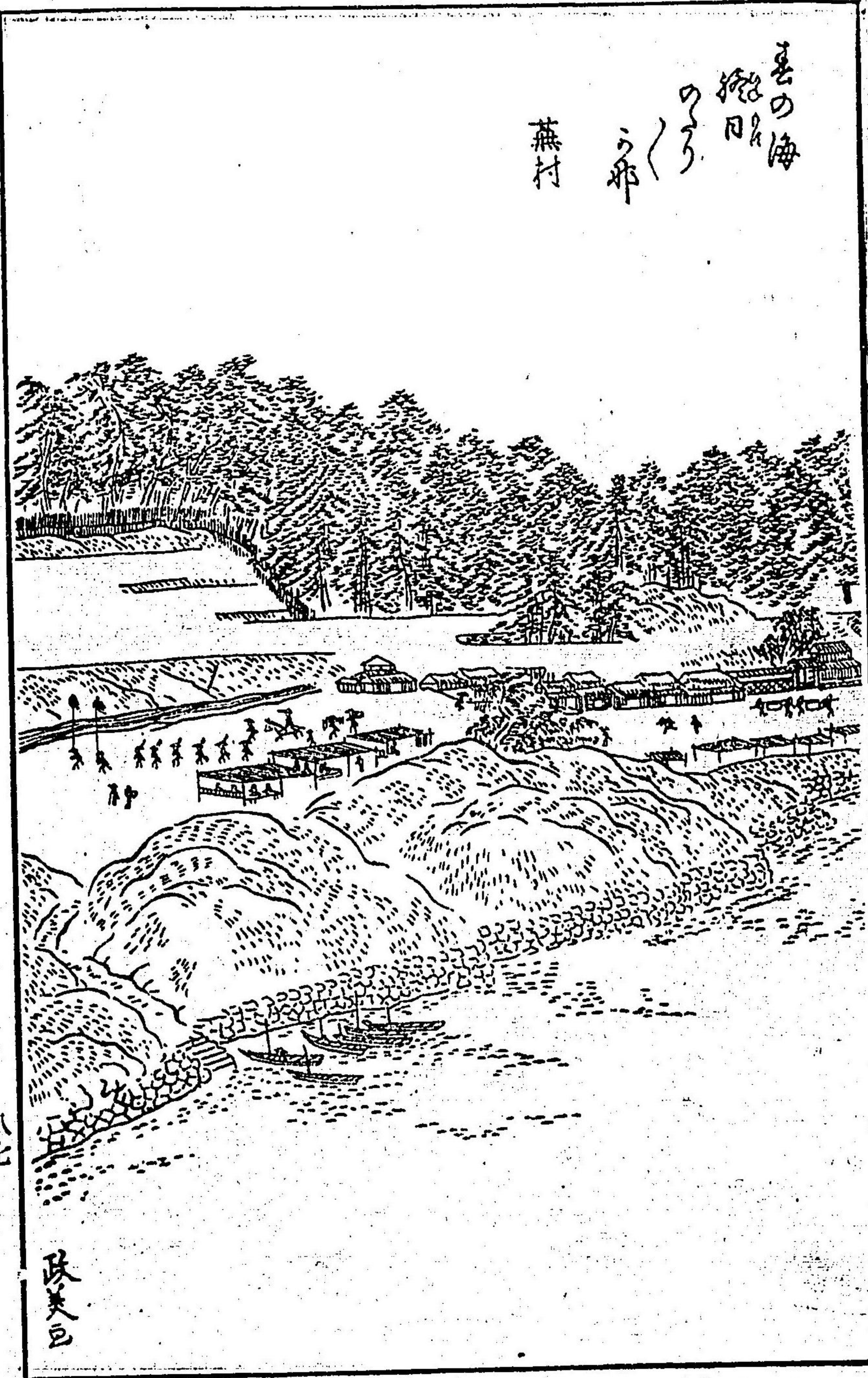
世中にて
縁に
お見えとくは
心ありあり

兼成

吹さらし
中くそよみ
たよみ
よらありし
ちの橋外

陶院一品大宰神
典仁親王



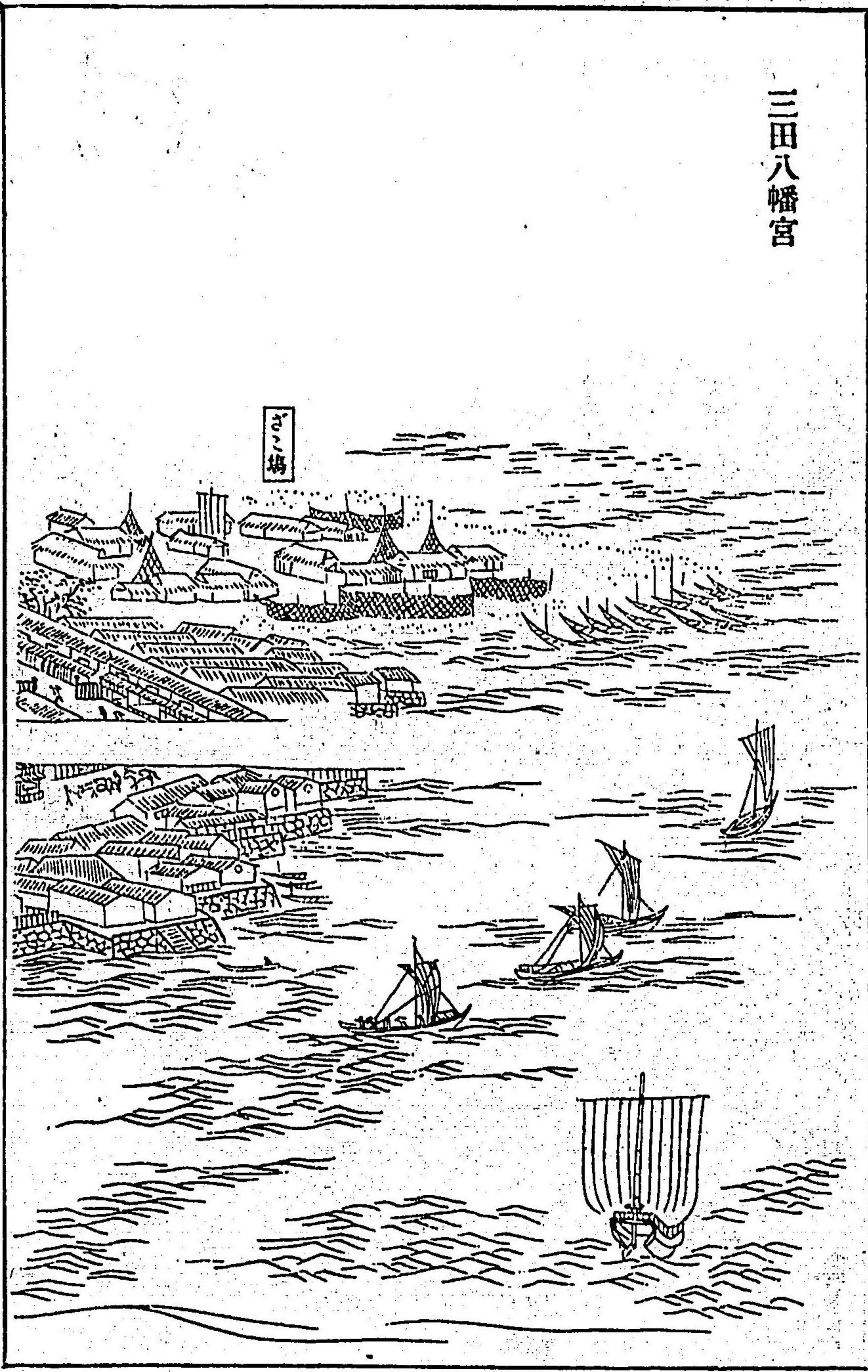


政美豆

高繩茶店



三田八幡宮



乳小島
 老い見
 志々屋
 放生舎
 修小坊
 松本堂

金杉毘沙門

まじ合



葛西政美

「本尊正觀音」閻浮檀金の立像也大師唐より歸朝の時龍宮より感得し東關巡行の時茲に安置し給ふ年歳累りて廢せしを太田左金吾源持資入道道灌此品川を領し此本尊を深く信じて大檀那と成て觀音堂を再興す

海晏寺 同所にありこゝに鮫頭觀音を安す當山は丹楓の名所にして秋の末は紅錦をさらすが如し

東海寺 同所にあり禪宗京師大徳寺の末院也當寺に鎌倉權五郎景政の塚あり開基は澤庵和尚産國は但馬國出石の人なり出家して諱を宗彰といふ寛永十五年十一月當寺を建營す此寺も丹楓ありて紅葉を賞す又萬年石といふ奇石あり

御殿山 東海寺に隣る品川宿の上方也昔太田道灌の館ありしといふ丘山にして峻しからず櫻樹も茂し彌生の花盛には春色に乘じ貴となく賤となくこゝに宴し京師の嵯峨御室にも異ならずながら雲と見れば雪とちりて花の香四方にかほりて酒をすゝめ歌詠詩を賦すも多かめり特に風景の地にして東南の方は海面はるかに晴て帆かけ船波をはしり雲につらなれば

田面の雁のわたるに似たり釣する蟹のいさり火は沖にちいさく浪間にすたく燈火かそれかあらぬかはるゝ夜の星かとのみぞみえまがふ嵐はげしきをりくは波こゝもとに立かゝりまるねの夢をやぶりける潮にひたす月のかげは曇らぬ鏡を洗ふが如く海より出て海に入大納言通方卿の詠じ給ひし「むさし野は月の入べき山もなしを花が末にかゝるしら雲」など思ひ出され又 後鳥羽院下野の歌に「あふ人にとへどかはらぬおなじ名のいく日になりぬむさしの原」風定り波無ふして海陸の賑ひのぼる人くだる人歩より行もあり馬のり物にて通るも多かりき成此所の風景を饗應かとおもはれける

八山 高輪の南にありむかし大日堂ありしゆる大日山ともいふ

芝大佛 高輪の上にある五智大佛の木像を安す寛永十二年但唱木食の草創也此木食上人は攝州多田の人也その母有馬温泉山の薬師に祈りて儲し子にて年十五歳にして但善木食の弟子となりて信濃國檀特山に

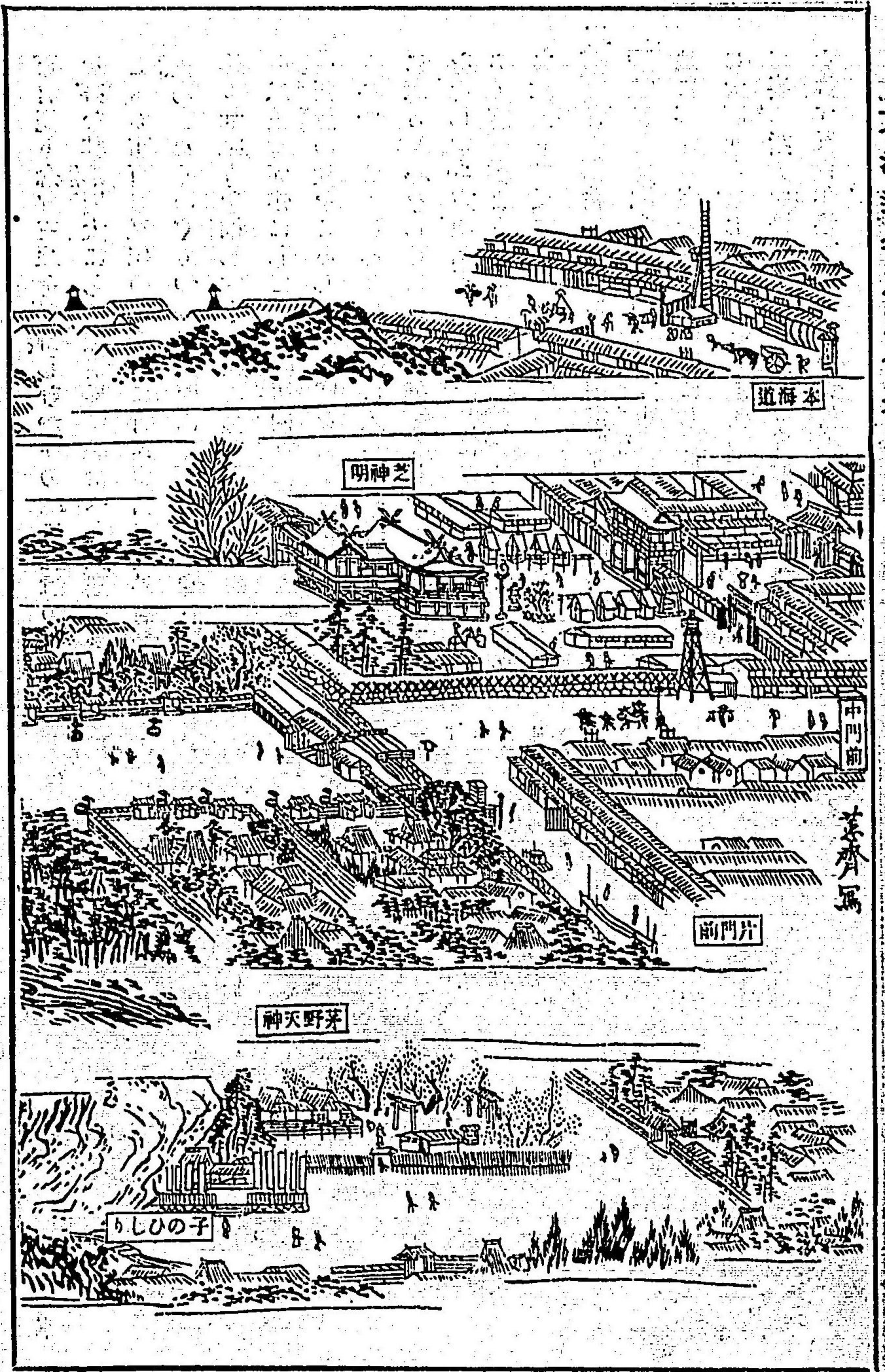
百日籠り念佛三昧を發得しむかひの峰に三尊の影向を拜む其形廣大にして虚空界に滿給へり又淺間嶽にこもる事百日又紀の那智山に行ふ事百日其外南海北溟あまねくめぐりつひに江府にくだり此大佛五尊を作り如來寺を創し六十一歳にして入寂す門前の石像の二王も同作にしてこれ陰陽阿吽の相をあらはし守一無適の性をこめし強勢の威をふるひて外境にをかされずまことに佛法の實際に入べき初門を表し六境に奪るゝ心をしらしめこれをまもりてとゞむることををしゆる方便也門の左のかたには櫻枝をかほし花さく春の梢よりをちこち風にさそはれて空にしられぬ雪ふりて又すてがたき所也

泉岳寺 高輪の上にある曹洞宗開基は門庵宗開和尚「本尊釋迦佛」當寺は中古阿左布菴にあり正保年中此地に移さる淺野家の菩提所にして累代の墳あり又傍に大石氏をはじめ四十七人義士の石塔あり簀戸を鎖て妄に詣人を許さず又碑文あり寺僧これを建て趣意を鑑す又近年洛東大我といふ僧楠石論といふ書を翻

芝海

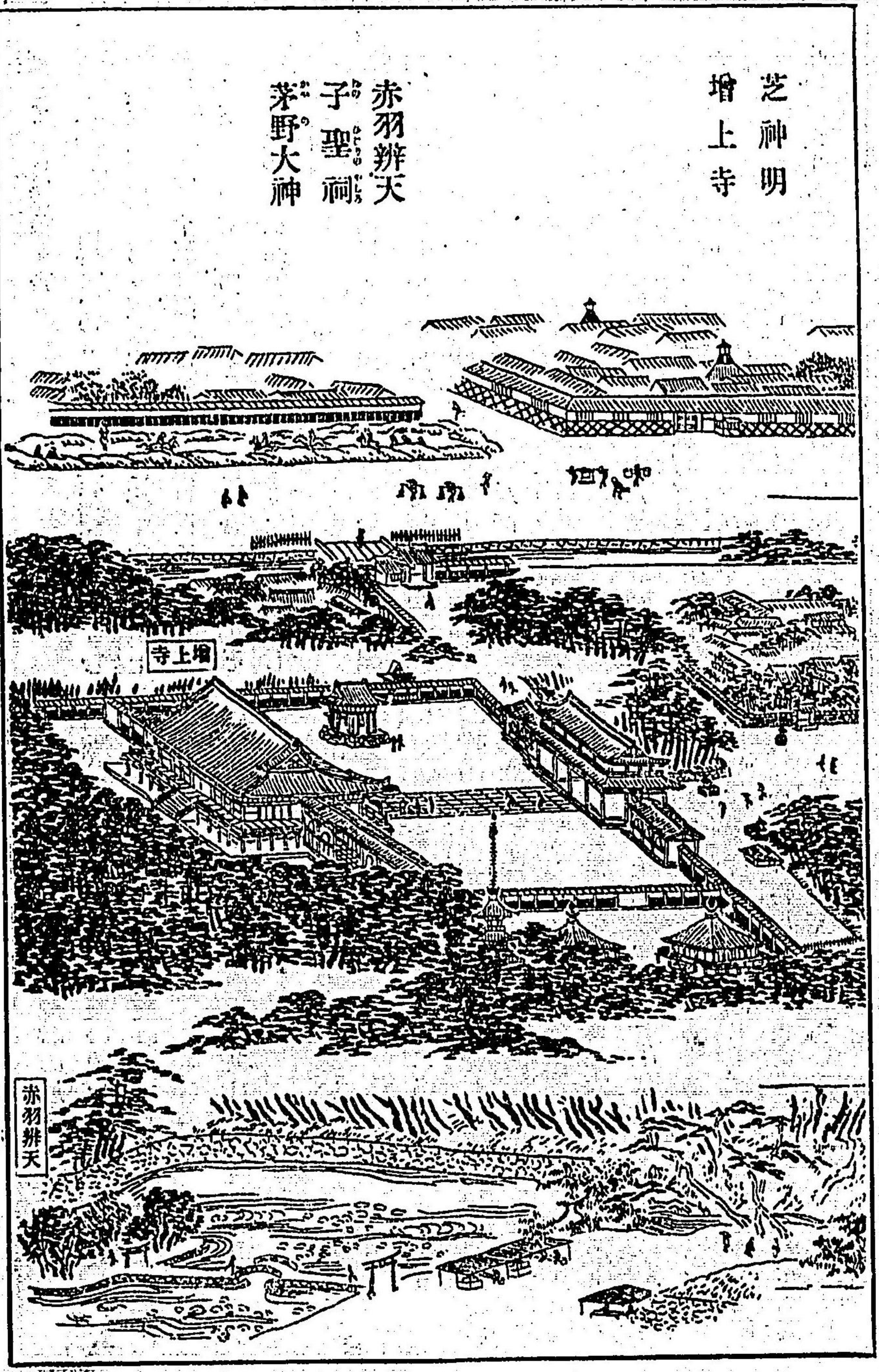
不逞功名萬戸侯
一系承勳海天神
長々竿子舞々
短々簀衣小々舟
播磨兩三聲盛繁
驚回四五個沙鷗
得魚沽酒江邊飲
醉臥蘆花對枕頭





芝神明
増上寺

赤羽辨天
子聖祠
茅野大神



刻して石良雄論を書り

三田八幡宮 田町にあり祭神男山石清水勘請すむかしは三田窪にあり正保年中こゝに移す此邊の生土神にして八月十五日隔年に祭祀を勤む世に渡邊綱こゝに誕じて此神を祀ひ祭る故に箕田源吾といふとぞこれ非也綱は攝州渡邊に産れ東に下りたる所見なし攝津名所圖會に見えたり

魚籃觀音 三田にあり三田山魚籃寺といふ浄土宗開山は法興上人本尊觀世音左に天羽衣を持右に魚を入たる籃を持給ふ法興上人諸國廻順の時長崎にて夢想の告ありて感得し給ふ靈尊也立像一尺許

西應寺 芝金杉にあり浄土宗鎮西派開基明賢上人應安元年造立

『本尊阿彌陀佛』惠心僧都の作當山十六世存因和尚は其頃法門の龍象學道の麟鶴也ければ官家よりも深く崇敬ありて即命ありて一夏九旬のうち法幢をたて一

の開基より綿々として佛智の恩澤に浴せり

道灌城蹟 西窪仙石屋敷の地をいふ今番神山といふ熊谷城山 同所土岐屋敷の地也熊谷直實が城跡といふ

雜魚場 芝の海濱の漁師町也日々に漁して市に出すこれを芝肴といふ

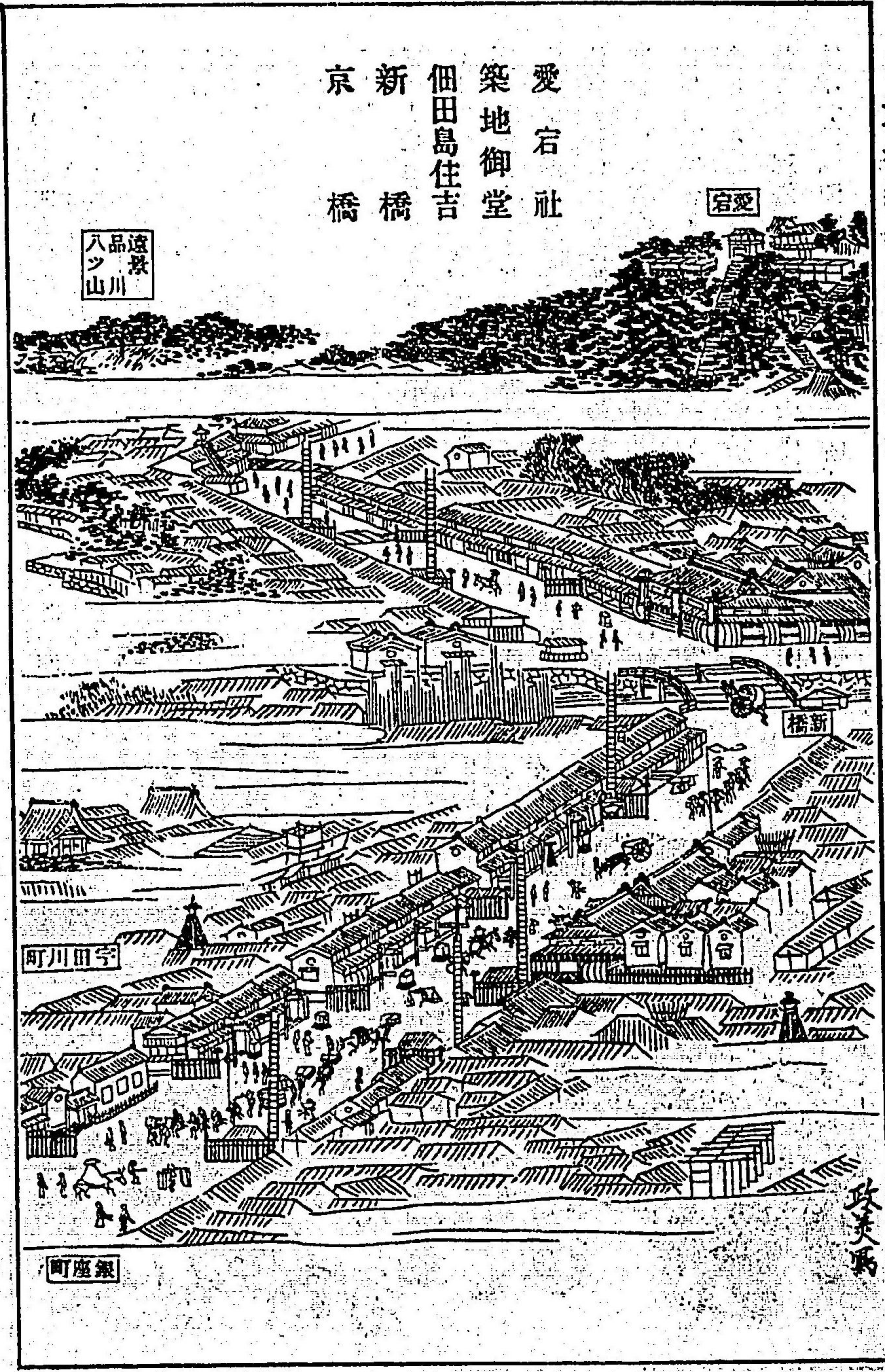
含海山 愛宕青松寺の後山をいふ芝の海上眼下に見ゆる

長南崎 源助橋の下流海手にあり

三縁山増上寺廣度院 芝にあり浄土宗關東檀林『本尊阿彌陀佛』惠心僧都の作長三尺八寸許當山の開基は總州千葉介の末裔として源空上人七世の嫡流西蓮社了譽上人の高弟大蓮社西譽聖聰上人と號す兼て浄土念佛の宗風を學びて三心即一の窓の前には五念四修の月をもてあそび事理俱頓のはやしの中には實教受用の花を詠じて武州江府貝塚の臺光明寺に住せらる舊地は今越後第と稱する所なるべし其頃是人皇一百二代 後小松院の御宇至徳二年きのと

の丑の夏光明寺に於て論議あり讚題は善導大師の四帖の疏に長時起行果極菩提といへる釋文也西譽上人能化として所化の證問者若者互に法門の扉をひらき光明寺をあらためて三縁山増上寺と號し一心金剛の血脈をうけつぎ第二世を明蓮社同仰上人と號し第三世を定蓮社聖觀音譽上人と號すそれより年歳はるかにおしうつりて第十二代の寺職能化を貞蓮社源譽上人と號すこれ増上寺中興也官家師檀の台命ありて御戒師と成血脈相傳ありしと也上人遷化は慶長十五年にして證を普光觀智國師と賜ふ此時に當つて易行法門の行運たちまちにひらけ時機また相應して一天四海宗風に歸する事そのかみにこえたり能化は一代の法藏を胸にたゝえ所化は十二の教文を眼にさらし學道をきはめ智徳をみがき説法利生はなほだひろければ當寺の院號を廣度院ともなづくとかや寺邊に御靈舎ありその後は山岡也前には所化寮連綿として山門巍々とし釋迦。文殊。普賢。十六羅漢の像を安す安國殿。黒本尊。開山堂。鎮守は熊野三所。飯倉天神。太子





愛宕社
築地御堂
佃島住吉
新橋
京橋

八品遠敷山川

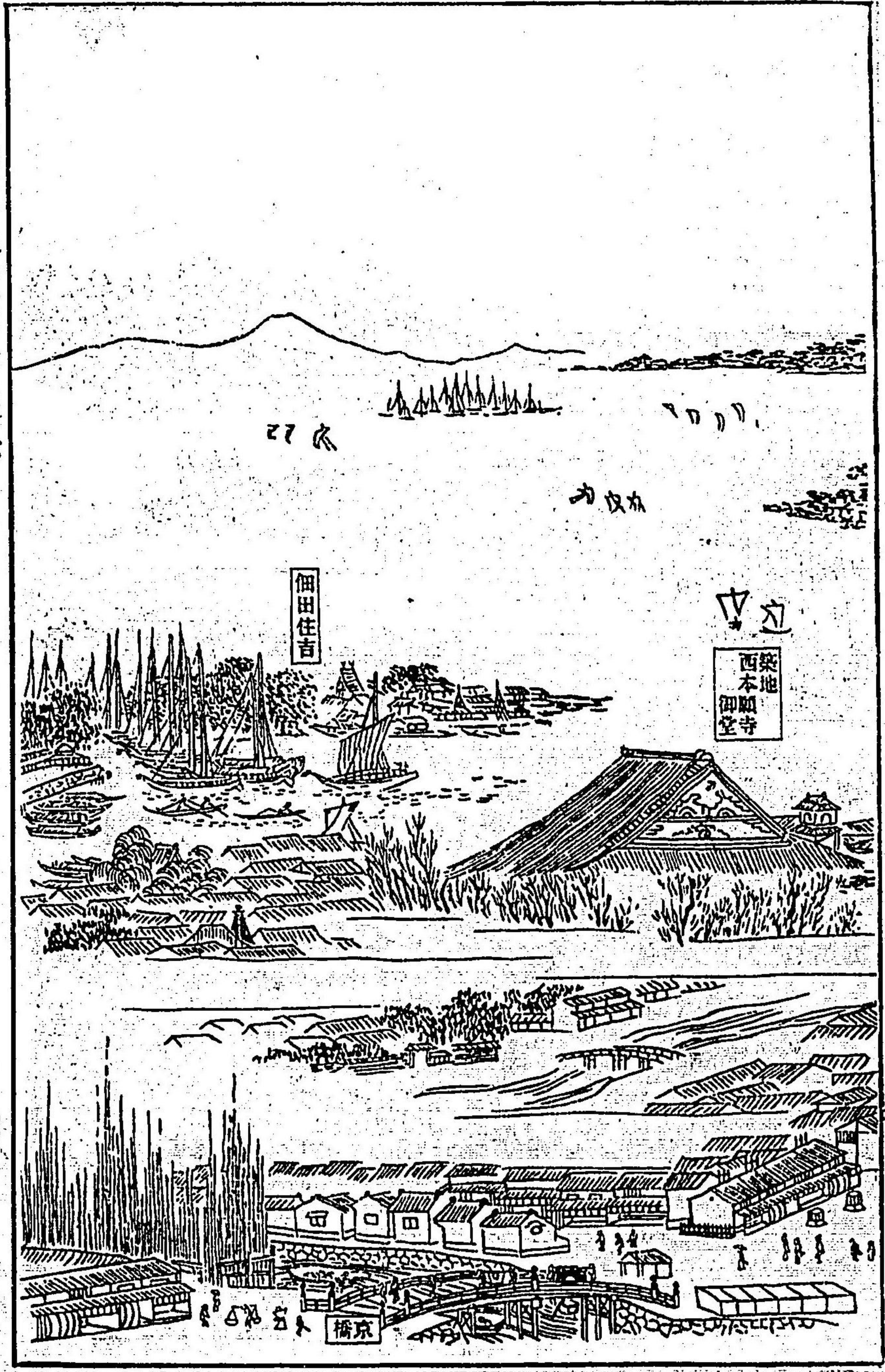
愛宕

新橋

町川田

町座銀

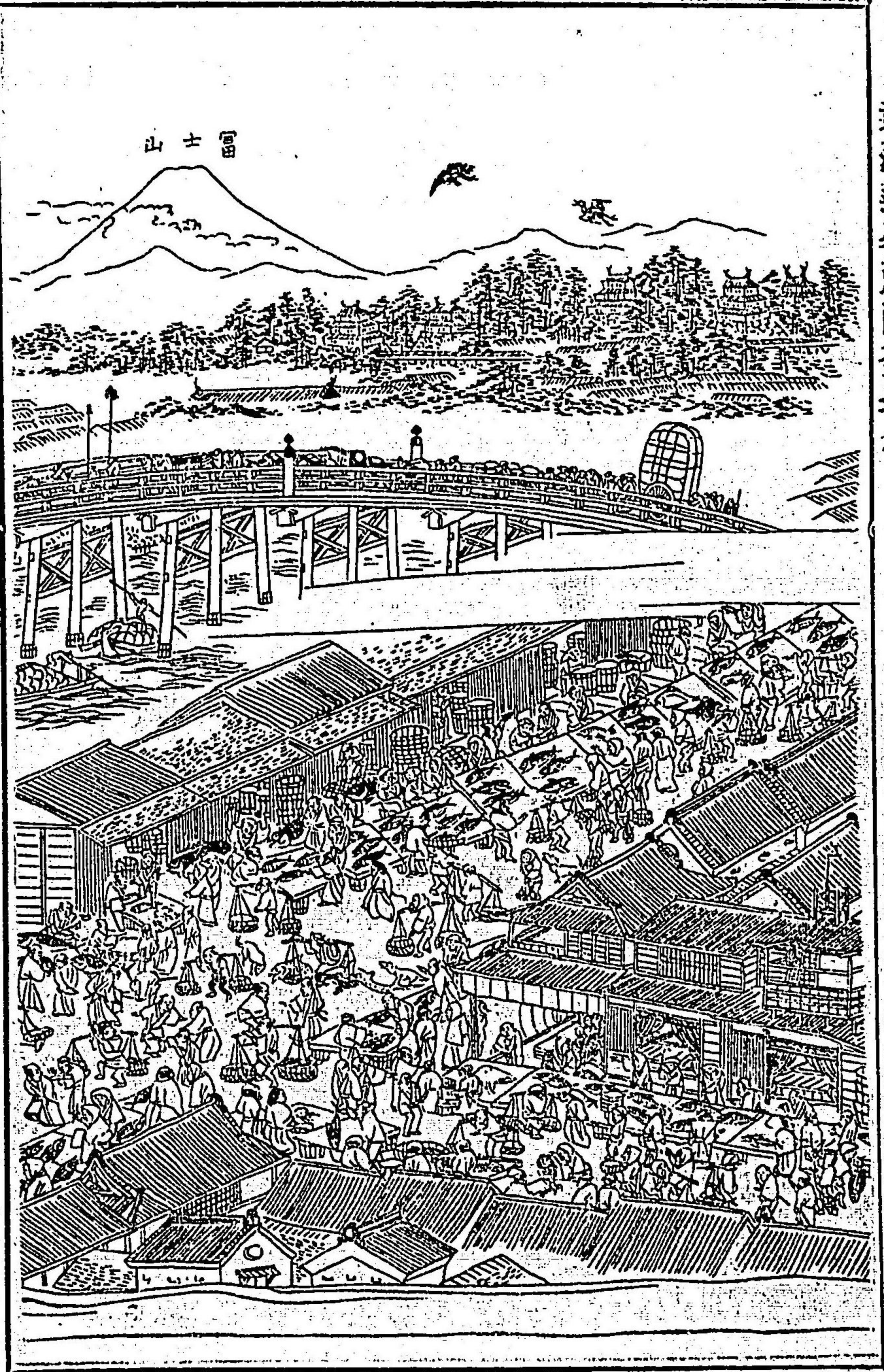
政美画



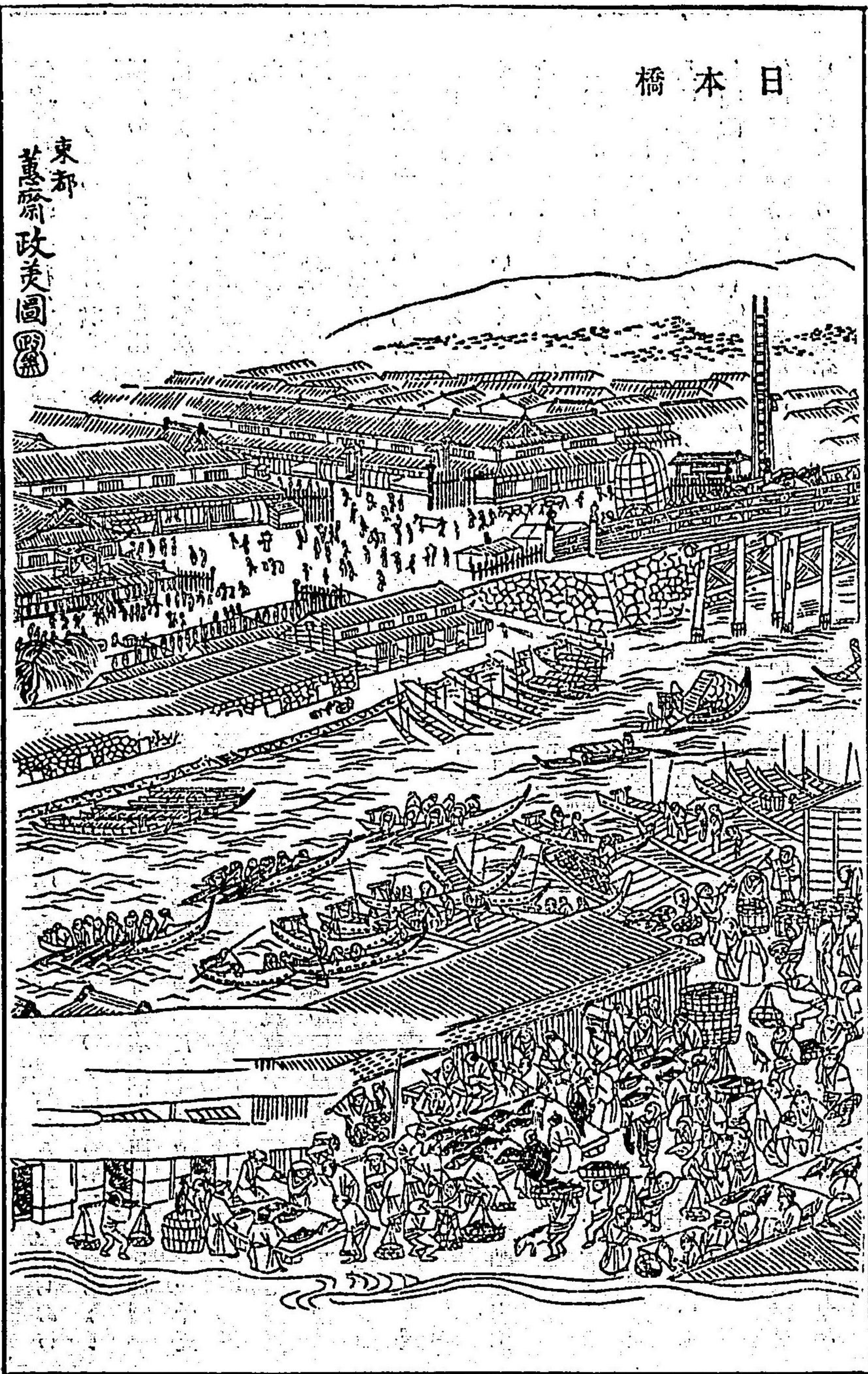
佃住吉

西築地御堂

橋京



日本橋



東都
葛原政吏圖

堂。經藏。金鼓。常行念佛堂。極樂橋。鷹御門。蓮池は本堂のうしろ柳の井は其北の方にあり糸櫻。曼陀羅石。圓座の松。圓山。産千世稻荷は觀智院にあり火消地蔵は花岳院に安す一文字席の五十僧。横木間席三十八僧。縁側席六十二僧。都て大衆三千餘といふ實に靈鷲山の會上黄金を布たる給孤園にも比せんや

飯倉神明宮 舊名日比谷といふ今芝神明と稱す別當金剛院神主西東氏例祭九月十六日

『祭神天照太神』社傳云一條院御宇寛弘二年九月十六日に御神幣並に大牙一品此地に天降りける人々あやしみ祭る所にいづくともしらす年七歳ばかりなる女子出來つて口ばしりていはく我はこれ神風や伊勢の二桂の神也常陸國鹿島の地に降臨し魔軍を破ひ退け歸路に及ぶわれ此地に跡をとめんとおもふ此ゆゑに二種のしるしをあらはす早く宮居を創し祭るべし後世此地ますく繁榮ならんと告て神はあがらせ給ひけり神勅にまかせ祠を營て神器を藏めこゝにはひ祭りける其後建久四年右大將頼朝卿奈須野に趣

き給ふ時當所宇多川に到て佩給へる劔みづからぬけて水底にしづむ此神明宮のうしろのかたに瀬ありて漲る水に光るものあり即右大將神明に詣して御劔をもとめ直に社殿に奉納したまひ尊敬淺からず一千三百貫の神領を寄附し給ふ星霜歴て明應三年の頃小田原北條關八州を掌握し威を四方に耀す此時社頭神領も廢し荒蕪に及ぶ天正中に官家の台命ありて舊觀に復し再營ありて神前の賑ひ和光の月利物の花ぶさ句ひこまやかにして神鈴の音神樂の聲たえずして平天下の御祈禱怠る事なし

愛宕權現 芝にあり別當圓福教院眞言宗京師愛宕山權現同神

『將軍地藏尊』行基大士の作社頭に太郎坊祠。大師堂。辨天祠。末社六前。二王門。鐘堂。地主稻荷社。延命地藏は石階の下にあり石段六十八段これを男坂といふ又右を女坂とよぶ抑愛宕山とは京師朝日峰白雲寺に准じて神躰は伊弉册尊迦具突智命を祭るこれを火伏の神と稱す本地を

將軍地藏として修羅闘諍の曠患を降伏し太平安寧の守護を加へ忍辱慈悲の尊躰をあらはし利益をあまねく衆生に蒙らしめ給ふがゆゑに遠く東關江府の地に台願をもつて御勸請あり其威徳いよくたかくして四海靜謐あやまたず靈驗日々にあらたなれば詣人間斷なく殊には此地風景の勝境なれば東南には芝品川の海面遠くは房總の山々鮮にして春の水秋の月に茶店の湯けふり山吹。喜撰を薫らせあるは豆茶。麥茶。香煎。賣茶婢までも京師の祇園。音羽の風流をうつすなるべし

へに移さる干潟の海なりしを築出し寺地とす近年御堂再興ありて壯麗たる道場也

東日本橋 慈寶珠高欄橋長さ二十八間江戸町の中央にして諸方の行程をこれより定む京師三條橋より當橋まで行程都て百二十四里半十五町。驛宿五十三次これを東海道といふ

築地御堂 築地にあり京師西六條本願寺輪番所也寺中五十五箇寺

此橋上四方晴て風色眞妙なり北に淺草。東叡山南に富士山峨々と聳え峰は雲間にさし入てかのこまだらの雪まで見え西の方は御城巍然とし東には海づらちかく行かふ舟もさだかに見えわたり橋上の行人征馬のたえ間もなく橋下には魚船。楫船。數百艘漕つどひて日毎に市を立る弊眞に三條九陌城隈に麗萬戸千門平旦に開くと此邊の事なるべし

『本尊阿彌陀佛』脇檀に開山親鸞聖人前住上人影を安す又聖徳太子七高僧の影あり

玉葉 旅人の行かたにふみ分けて 右 大 臣

初は淺草橋の内にありしが明曆年中回祿の災已後こ

東海道名所圖會大尾

東海道名所圖會跋



手羊之皮不如一狐之腋示君
 一焉國務重十年見是謂國果
 勝于見乎不知重見成國豈見
 能國固見及國無見非圖素今
 今為見者多焉國者少肅深圖
 而豁其襟懷娛心志國不謂不
 勝于是乎是予之取去之意也

候曉解袍繫巾，系沙沽，登湖素
海，卷之杜，為橋遠之濱，名橋了
龍大堤，二流之穗，清見美，京艾
落雲，嶽箭山，天闕宵，渭，越，恒，極
必，府，心，遂，過，館，驛，五，十，者，餘，郵
到，東，都，因，倦，所，紅，界，畫，矣，步，行
也，縱，探，禹，穴，登，龍，門，何，嶂，乎，雖
然，鄙，癖，足，供，為，他，人，百，呆，不，壯

言名論聽者，遂飽，謂又果，務也
圖乎，謂國果勝於，見乎，心，不，襲
圖，難，獲，捷，徑，矣，略，贅，數，語，伸，其
意，鼓，腹

皇和清平之辰而已矣

寶政九年庚子己龍九月

平安

於里籬岩 湘夕



葵文庫刊行決定順序豫告

葵文庫は徳川氏時代に梓行せられたる草双紙。繪入讀本。諸國名所圖會等各方面に涉り悉く繪本のみを撰み原本通り挿繪を挿入し讀みて面白く見て面白きものとして家庭の好讀物たらしめんとす製本のみ印刷の明眞に聖世の珍本なり（定價及會員入會手續前金割引法裏面に説明す）

第壹編 修紫田舎源氏 〔柳亭種彦作 歌川國貞畫〕 全四卷 第一卷（發賣禁止） 第二卷以下續刊

第貳編 東海道名所圖會 〔秋里藤島編 東西州名家畫〕 全二卷 既刊

第參編 繪本西遊記 〔岳亭丘山譯 葛飾北齋等畫〕 全二卷 上卷 六月下旬 下卷 六月下旬

第四編 椿説弓張月 〔曲亭馬琴著 葛飾北齋畫〕 全三卷 上卷 六月下旬 下卷 以下續刊

第五編 都名所圖會 〔秋里藤島編 竹原春湖齋畫〕 全四卷 第一卷 六月中旬 第二卷 以下續刊

特別編 南里見八犬傳 〔曲亭馬琴著 柳川重信畫〕 全八卷 第一卷 七月下旬 第二卷 以下續刊

葵文庫購讀家の注意

正價は必ずこの本でも一冊金七拾錢

明治の出版界に於ける最も廉價なる面白き有益なる書籍は此葵文庫であります雑誌を購ふ程の價にて毎月發行毎に買續いて行けば全部百卷の一大文庫が揃ひます

前金拂込みに對し更に割引します

葵文庫は發行部數の標準を普通書籍發行部數の凡十倍と見て算盤をとつて勉て廉價に讀者の便利を計る考で取纏めての前金御注文に對しては左の割引を致します

○十冊分前金六圓參拾錢 ○二十冊分前金拾貳圓貳拾錢

○三十冊分前金拾八圓 ○五十冊分前金貳拾九圓

○七十冊分前金參拾九圓九拾錢 ○百冊分前金五拾六圓

會員には猶一層有利なる待遇法があります

三千名を限り會員を募集致します會員には左の割引の外雑誌あふひを無代にて贈呈し時に有益なる繪畫冊子等を刊行して贈呈致します入會金は金五圓であります

會員は毎冊金五拾六錢にて購讀する事が出来ます

著作權所有

明治四十三年六月五日印刷
 明治四十三年六月十二日發行
 東海道名所圖會二

編輯者兼 葵文會

代表者 林 縫之助

正價 金七拾錢
 郵稅 金拾錢
 振替 金四拾錢
 東京 金四拾錢

東京市京橋區南傳馬町二丁目十二番地

印刷者 會社 吉川弘文館

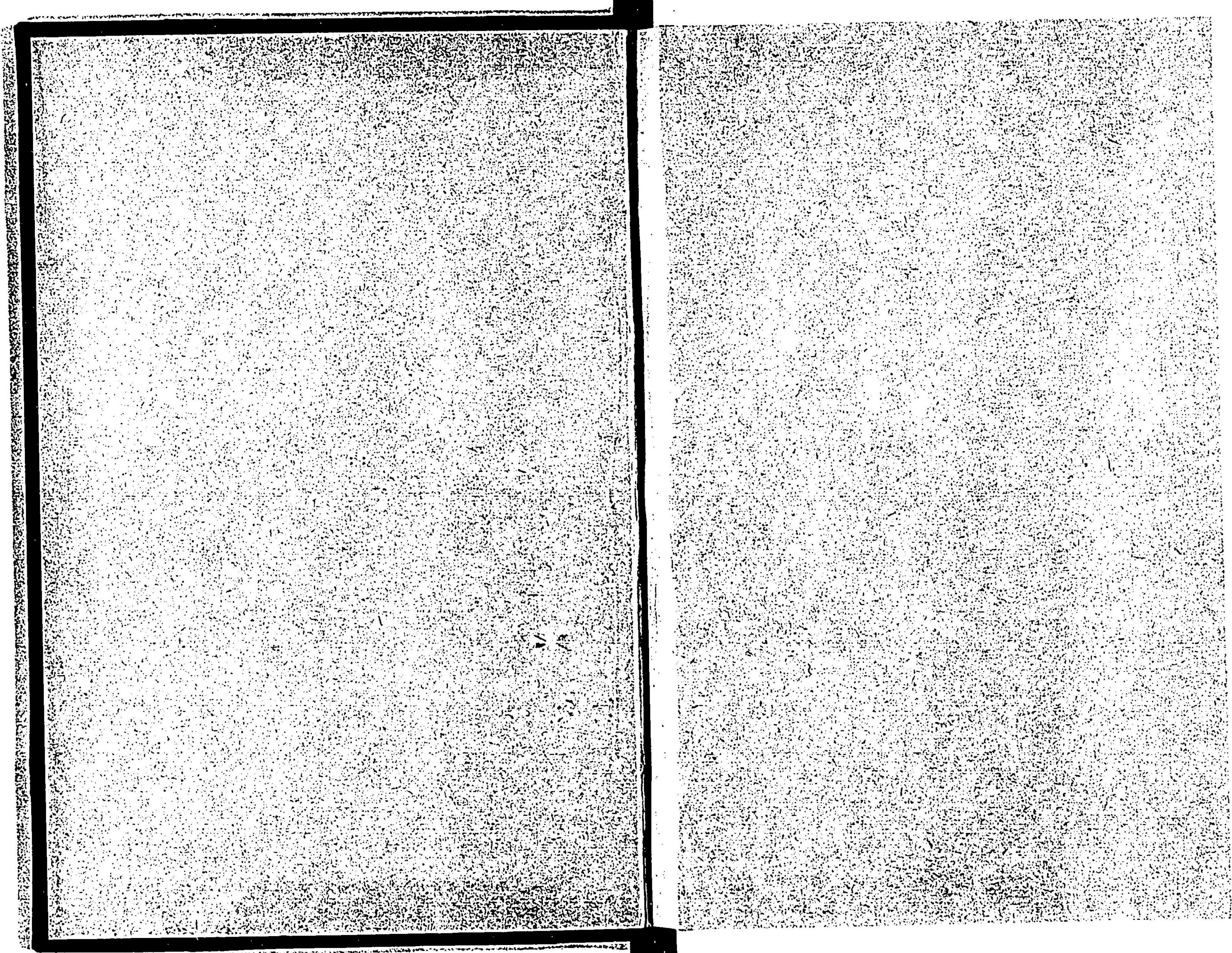
代表者 吉川半七

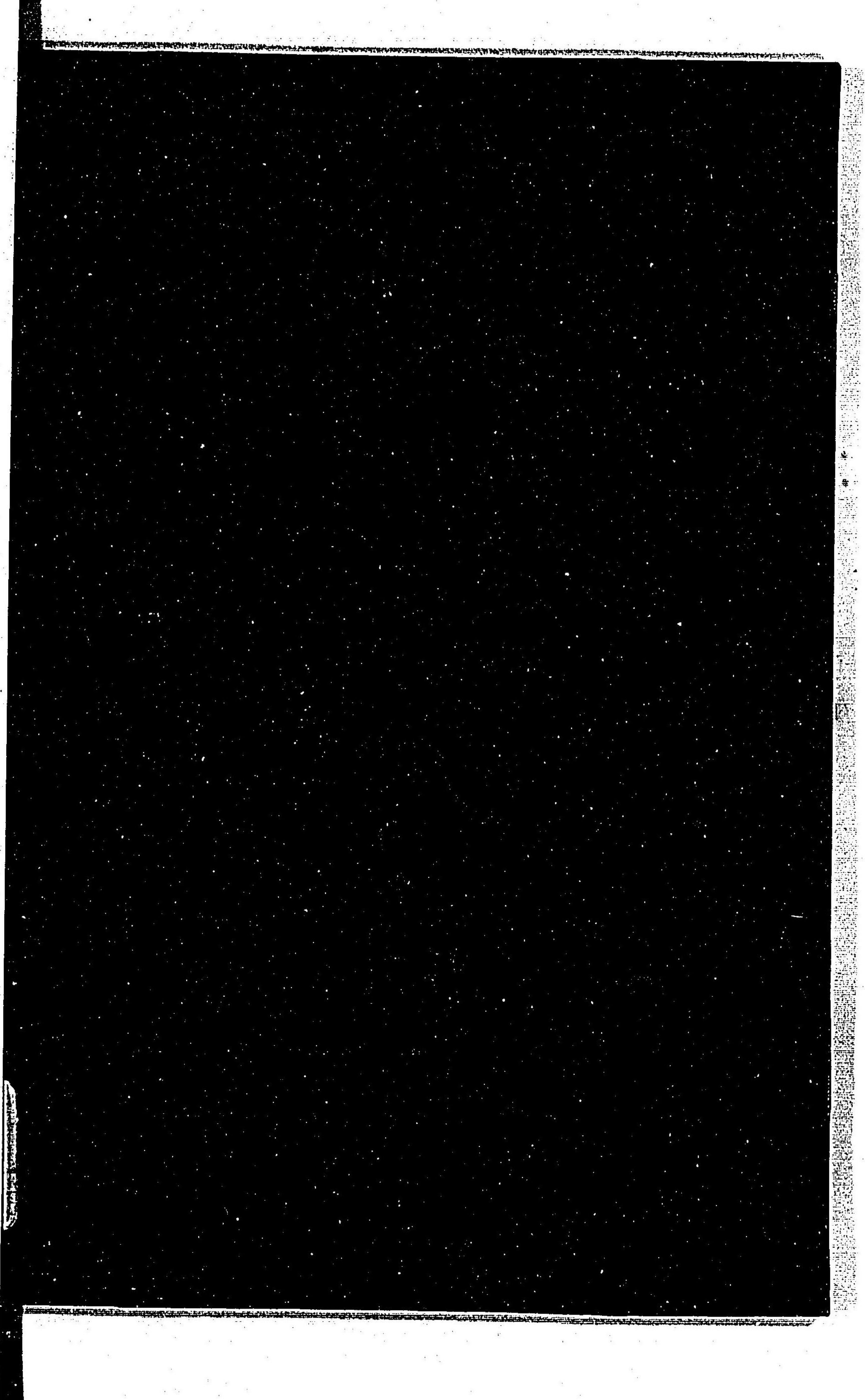
東京市神田區三河町三丁目四番地

印刷所 武木印刷所

發行所 會社 吉川弘文館

電話本局九七七番





330
12

